

# 両国の秋

岡本綺堂

青空文庫



「ことしの残暑は随分ひどいね」

お絹きぬは楽屋へはいつて水色の

かみしも

をぬいだ。八月なかばの夕

日は孤城を囲んだ大軍のように筵むしろば張りの小屋のうしろまでひた

寄せに押し寄せて、すこしの隙すきもあらば攻め入ろうと狙っている

らしく、破れた荒筵のあいだから黄金こがねの火箭ひやのような強い光りを

幾すじも射い込んだ。その箭をふせぐ楯のように、古ぼけた金巾かなきん

のビラや、小ぎたない脱ぎ捨すての衣服きものなどがだらしなく掛かつて

いるのも、狭い楽屋の空気をいよいよ暑苦しく感じさせたが、一

座のかしらのお絹が今あわただしく脱いだ舞台の衣裳は、袂たもとの長い薄むらさきの紋付きの帷子かたびらで、これは見るからに涼しそうであつた。

白い肌襦袢一枚の肌もあらわになつて、お絹はがっかりしたようにそこに坐ると、付き添いの小女こおんなが大きい団扇うちわを持つて来てうしろからばさばさと煽あおいだ。白い仮面めんを着けたように白粉おしろいをあつく塗り立てたお絹のひたいぎわから首筋にかけて、白い汗が幾すじかの糸をひいてはじくように流れ落ちるのを、彼女かれは四角に畳んだ濡れ手拭ぬで幾たびか煩うるさそうに叩きつけると、高い島田の根が抜けそうにぐらぐらと揺らいで、紅い薬玉くすだまのかんざしに銀の長い総ふさがひらひらと乱れてそよいだ。見たところはせいぜい

十七、八のあどけない若粧りであるが、彼女がまことの暦は二十歳をもう二つも越えていた。

「ほんとうにお暑うござんすね」と、小女のお君は団扇の手を働かせながら相槌を打った。

「暑いせいか、木戸も閑なようですね」

「あたりまえさ。この暑さじゃあ、大抵の者はうだつてしまわね。どうでこんな時に口をあいて見ているのは、田舎者か、勤番者か陸尺ぐらゐの者さ」

手拭で目のふちを拭いてしまつて、お絹は更に小さいふところ鏡をとり出して、まだらに剥げかかった白粉の顔を照らして視ていた。

「中入りなかいが済むと、もう一度いつもの芸当をござらんに入れるか、  
 忌いやだ、いやだ。からだが悪いとでもいって、お若わかのように二、三  
 日休んでやろうかしら」

「あら、姐ねえさんが休んだら大変ですわ」と、お君はびっくりした  
 ように眼を丸くした。

「お若さんが休んでいるのはまだいいけれど、姐さんに引かれち  
 やあ、まったく大変だわ」と、茶碗に水を汲んで来た他の若い女  
 が言った。「あたし達は、ほんの前まえげい芸ですもの」

「前芸すずかぜでたくさんだよ、この頃は……。ほんとうの芸当はもう少  
 し涼風すずかぜが立って来てからのことさ。この二、三日の暑さにあた  
 ったせいかな、あたしは全くからだが大変なんだよ」

「そりやあ陽氣のせいじやありますまい」と、地<sup>ぢ</sup>弾<sup>ひ</sup>きらしい年<sup>とし</sup>増<sup>まし</sup>の女が隅の方から忌<sup>いや</sup>に笑いながら口を出した。「向<sup>むこう</sup>柳<sup>やなぎ</sup>原<sup>はら</sup>はどうしたのか、この二、三日見えないようですね」

「二、三日どころか、八月にはいつてからは、碌<sup>ろく</sup>に寄り付きやあしないのさ、畜生、憶えているがいい」

お絹は眼にみえない相手を罵<sup>のの</sup>るように呺<sup>つぶや</sup>いた。金地に紅い大きい花を毒々しく描いてある舞台持ちの扇で、彼女は傍にある箱を焦<sup>じ</sup>れたそうにとんとんと叩くと、箱の小さい穴から青い頭の蛇がぬるぬると首を出した。

「畜生、お前が出る幕じゃあないんだよ」

扇で頭を一つ叩かれて、蛇はおとなしく首をすくめて、もとの

穴に隠れてしまった。

「八つあたりね、可哀そうに……。ずいぶん邪慳じやけんなこと」と、若い女が笑った。

「あたしは邪慳さ。おまけにこの頃は癩かんが起つてじりじりしているから、たれかれの遠慮はないんだよ」と、お絹は扇で又もやその箱を強く叩いたが、蛇はもう懲りたと見えて、今度は首を出さなかつた。

「お察し申しますよ」と、年増はすこし阿諛おもねるようにしみじみ言った。「向柳原はほんとうにどうしたんでしよう。まったく不実ふじつですね。そんな義理じゃないでしょうが……」

「義理なんか知っている人間かい」と、お絹はさも憎いものよ

うに扇を投げ捨てた。「今に見るがいい。どんな目に逢わせるか」  
お君は左の手のひらにひと掴みの米をのせて来て、右の指さき  
で一粒ずつ摘みながら箱の穴のなかへ丁寧におとしてやると、青  
い蛇の頭が又あらわれた。ことし十五のお君ももう馴れていると  
みえて、別に気味の悪そうな顔もしていなかった。

舞台の方でかちかちという拍子木の音がきこえると、お絹は  
そこにある茶碗の水をひと息にぐつと飲みほして、だるそうに立  
ちあがった。お君はうしろに廻って再び彼女に別の衣裳を着せか  
えた。

今度は前と違って、吉原の花魁の裌襦を見るような派手なけ  
ばけばしい扮装で、真つ紅な友禅模様の長い裾が暑苦しそうに

彼女の白い脛はぎにからみついた。お絹は緋縮緬しじぎの細紐しじぎをゆるく締めながら年増の方を見かえった。

「おばさん。きようは三味線がのろかったぜ。もう少し早間はやまにね。いいかい」

「はい、はい」

鬢びんをもう一度搔きあげて、お絹は悠々と楽屋を出ると、お君は蛇の箱をかかえてその後について行った。年増も三味線をかかえて起った。

あとに残った若い女はほつとしたような顔をして、お絹が脱ぎ捨かたての帷かたびらや子を畳み付けていると、今まで隅の方に黙って

煙草をすっていた五十ぐらいの薄あばたのある男が、さっきの蛇

のように頭をもたげて這い出して来て、若い女に話しかけた。

「お花さん。姐さんはひどくお冠かんむりが曲がっているね」

「おお曲がり。毎日みんなが呶鳴られ通しさ。やり切れない」と、お花は舌打ちした。

「だが、無理じゃあねえ。向柳原が近来の仕向け方というのも、ちつと宜よろしくねえからね」

「まったく豊とよさんの言う通りさ。けれども、姐さんもずいぶん無理をいってあの人をいじめるんだからね。いくら相手がおとなしくつても、あれじゃあ我慢がつづくまいよ」

「それもそうだが……」と、豊という五十男はどつちに同情していいか判らないような顔をしてまた黙ってしまった。

この一座の姐さんと呼ばれている蛇つかいのお絹には、仁科にしなり林之助んのすけという男があつた。林之助は御直参ごじきさんの中でも身分のあまりよくない何某組なにがしの御家人ごけにんの次男で、ふとしたはずみからこのお絹と親しくなつて、それがために実家をとうとう勘当されてしまつた。低い家柄に生まれた江戸の侍としては、林之助はちつとも木綿摺もめんずれのしなないおとなしやかな男であつた。相当に読み書きもできた。殊にお家いえりゆう流りゆうを達者に書いた。

勘当された若い侍はすぐにお絹の家に引き取られた。お絹が可愛がつているものは、林之助と蛇とであつた。こうして一年ほども仲よく暮らしているうちに、男はある人の世話で御納戸衆おなんどしゆう六百五十石の旗本杉浦中務すぎうらなかつかさの屋敷へ中ちゆう小姓ごしやうとして住み付く

ことになった。窮屈な武家奉公などしないでも、お前さん一人ぐ  
らいはあたしが立派にすごしてみせると、お絹はしきりにさえぎ  
って止めたが、すなおな林之助もこの時ばかりは無理に振り切っ  
て出て行つた。杉浦の屋敷は向柳原で、この両国と余り遠くもな  
かつた。それはお絹が可愛がつている三匹の青い蛇がだんだん寒  
さに弱つてゆく去年の冬の初めであつた。

旗本屋敷の中小姓がおもな勤めは、諸家への使番とゆうひつ祐筆代理  
とであつた。人品がよくてお家流を達者にかく林之助は、こうし  
た奉公の人に生まれ付いていたので、屋敷内の気受けも悪くなか  
つた。屋敷へはいつてからも、林之助は用の間をひまみてお絹にたび  
たび逢いに来た。東両国のみせもの観世物小屋の楽屋へも時どき遊びに来

た。それが今年の川開き頃からしだいに足が遠くなつて、お絹の家にも楽屋にも林之助の白い顔が見えなくなつた。焼けるような真夏の暑さにむかつて青い蛇は生き生きした鱗の色をよみがえらせたが、蛇つかいの顔には暗い影が始終まつわつていた。

「どう考えても向柳原の仕打ちが其そでねえようだ」と、豊は最後の判決をくだした。「ちつとぐれえ姐さんが無理をいつたところで、そりやあ柳に受けているだけの義理もあろうというもんだ。なにしろ、かれこれ一年の余もああして世話になつた以上は……おいらつちのようなこんな人間でも、人の世話になつたことは覚えてゐる。まして痩せても枯れても二本差しているんじやねえか。堀川のお俊しゅんを悪く気取つて、世話しられても恩に被きぬは、あんま

り義理が悪かろうと思うが……。ねえ、どんなもんだろう」

「そりやあこつちでばかり言うことで、男の方の身になったら又どんな理屈があるかも知れないからね」と、若いお花は冷やかに言つて、扇で胸をあおいでいた。

「お花さんはとかくに男の方の鼻<sup>ひいき</sup>ばかりするが、こりやあちつとおかしいぜ」

「そうかも知れない」と、お花はつんと澄ましていた。「向柳原はいい男だからね」

「姐さんより年下だろう」

「ふたつ違いだから二十<sup>はたち</sup>歳さ」

「色男盛りだな」と、豊は羨ましそうに言った。

「世間に惚れ手もたくさんあらあね。姐さんばかりが女でもあるまい」

「悟ったもんだね」

「悟らなくって、こんな稼業ができるもんかね。姐さんはまだ悟りが開けないんだよ」

「そうかしら。だって、蛇は執念深いというぜ」

「蛇と人間と一緒にされて堪まるもんかね」

「よう、よう。浮気者」と、豊は反り返って手をうった。

「静かにおしよ。舞台へきこえらあね」

二人はだまって耳を澄ますと、舞台では見物の興をそそり立てるような、三味線の撥ばち音が調子づいて賑やかにきこえた。

「姐さんはまったくこの頃は顔色がよくないね」と、豊は又ささやいた。

「癩が昂たかぶつて焦れ切っているんだもの。あれじゃあからだにも障るだろうよ。あんなにも男が恋しいものかね」

「浮気者にやあ判らねえことさ」

「知らないよ。禿はげあたま、畜生、ももんじい」と、お花は扇を投げつけて笑ったが、また急に子細らしく顔をしかめて舞台の方を見かえった。

舞台の三味線の音は吹き消したように鎮まっていた。

「おや、どうしたんだろう」

見物のざわめく声が俄にわかにきこえた。舞台の上をあわてて駆け

てゆく足音もみだれて響いた。一種の不安に襲われた二人は、思わず腰を浮かせて舞台の様子を窺おうとするときに、小女のお君が顔色を変えて楽屋へ駈け込んで来た。

「大変。姐さんが舞台上で倒れて……」

ふたりも飛び上がった。舞台上へ駈け出した。

二

向う両国の観世物小屋でこんな不意の出来事が人を驚かしたのは、文化三年の江戸の秋ももう一日でちょうど最中もなかの月を観みようという八月十四日の昼ひるの七つ（四時）下がりであった。座がしら

のお絹が舞台で突然に倒れたので、見物も楽屋の者も一時は驚いたが、お絹はすぐに楽屋へ担ぎ込まれた。あとは前芸のお花がすこし繋いでいて、それから太夫病気の口こうじょう上じょうを述べて、いつもより早目に打ち出した。

お絹がほんとうに人心地の付いたのはそれから半はんとぎ晌ばかりの後で、医者やはり暑気あたりだといった。しかし、さのみに心配するほどのことはない、こうして静かに寝かして置けば自然におちつくに相違ないと気づけの薬をくれて行つた。はじめは非常に驚かされた木戸の者も楽屋の者もこれで漸ようやくおちついて、見舞の口上などをいってだんだんに帰つた。

お絹はもう目をあいていたが、それでもすぐに起きる元気はな

かった。枕もとには前芸のお花と小女のお君のほかには地弾きのお辰と楽屋番の豊とよきち吉とが残っていた。楽屋にはほかにもう一人お若という前芸の女がいるが、これも暑気あたりで二、三日前から休んでいた。その上にお絹がまた病氣引きということになれば、この小屋はあしたから休むよりほかはないと、関係の者はすぐにあしたの糧かてを気づかったが、こうなるとみんなも生き返つたような気になった。

「まあ、まあ、なにしろよかった。この二、三日はあんまり残暑がひどいからさ。おまけにこの楽屋はちつとも風がはいらないんだからね」

お辰は病める太夫の枕もとをそつと離れて、楽屋のうしろに垂

れている荒筵を少し押し分けると、夕日の光りはもう山の手の高台に隠れて、下町の空は薄い浅黄色に暮れかかっていた。上流うわてから一艘の屋根船がしずかに下って来て、大川の秋の水は冷やかに流れていた。近所の小屋もみな打ち出したとみえて、世間は洪水のあとのようにひっそりして、川向うの柳橋の栈橋さんばしで人を呼ぶ甲かんばし走った女の声が水にひびいて遠く聞えるばかりであった。

「それでも日が落ちると、ずっと秋らしくなるね」と、お辰はもとの枕もとへかえって来た。そうして、お絹の青ざめた頬に団扇の風を軽く送りながら、その力のないひとみを覗き込むようにして訊いた。

「気分はどうですえ。もういいの」

お絹はうなずくように眼をかすかに動かした。今お辰に声をかけられるまで、彼女の魂は夢とうつつの境にさまよいながら、男と自分との楽しい過去や、切ない<sup>せつ</sup>現在や、悲しい未来や、さまざまの恋の姿を胸の奥に描いていたのであった。

林之助が杉浦の屋敷へ住み付くときに、お前は再び侍になってこのわたしをどうしてくれると念を押ししたら、それは決して心配するな、時節が来ればきつと夫婦になる。蛇つかいの足を洗って相当の<sup>かりおや</sup>仮親をこしらえて、仁科林之助の御新造<sup>ごしんぞ</sup>さまと呼ばせてみせると、男は重い口で自分に誓った。しかしそれは一時の気休めで、自分が武家の女房になれようとは思えなかった。自分でもなりたいたとは思わなかった。ここで一旦手を放せば、自分がつか

んでいる男は鳥のように逃げてしまつて、おそらく再び自分の手へは戻るまい。しよせん男と自分との縁は無いものだど、お絹は止めても止まらない男を出してやるときに、心の底では悲しく諦めていた。

しかし男はその後もたびたび逢いに来てくれた。そうして、時節を待つてくれ、きつと夫婦になると繰り返し返して言った。いくら嬉しいと思つても、お絹は窮屈な武家の女房にはなりたくはなかつた。それでも男がそれほど自分を思つていてくれるということに就いて、彼女は言い知れない楽しみと誇りをおさえることは出来なかつた。彼女は諦めながらもやはり林之助に憬こがれぬいていた。男がこの頃ちつとも寄り付かないのを、彼女は病気になるほ

ど怨んでいた。

上の御用が忙がしいので屋敷が抜けられない。そういう余儀ない事情があるのを知りながら、男を怨むほどの初心うぶでもない、わからずやでもないとお絹は自分で自分の値踏みをしていた。しかし、林之助が姿をみせないのはほかに理由わけがあるらしい。その疑いが彼女の胸に強い根を張つて、もしそれが果たして事実ならば、男を執り殺してやりたいほどに口惜くやしく思いつめていた。

うたがいの相手はやはりこの両国の列ならび茶屋のお里さとという娘で、その店へときどきに林之助が入り込んでいるという噂が、お辰やお花の口から彼女かれの耳にもささやかれた。勿論、茶屋へ行つて茶を飲んだからといって不思議はないが、このごろ自分のところへ

ちつとも寄り付かないという事実には照らしあわせると、それが深い意味をもっているように疑われないでもなかった。お絹の疑いは一日増しに根強くなつて、もうこの頃ではどうしてもそうなければならぬと思われようになつてきた。

「今に証拠を見つけてやる」と、彼女は心のうちで叫んでいた。お辰やお花にも鼻はなぐすり薬をやつて、お里の店の様子を絶えず探らせようとしていた。

今も夢うつつでその事ばかりを考えていた。もう少し涼しくなると、彼女は鱗うろこ形かたの銀紙を貼り付けた紅あかい振袖を着て、芝居で見る清きよ姫ひめのような姿になつて、舞台上で蛇を使うことがある。

自分が丁度その姿で男を追い掛けてゆくと、両国の川が日高川ひだかがわ

になつて、自分が蛇になつて泳いでゆく。そんな姿がまぼろしの  
ように彼女の眼の前に現われた。と思うと、自分の可愛がついて  
る青い蛇が忽ち一丈あまりの大蛇だいじやになつて、林之助とお里の二  
人を巻き殺そうとしている。男と女は悲鳴をあげて苦しみもがい  
ている。そんなおそろしい景色が覗きからくりの絵のように彼女  
の眼の前に展開された。そのからくりの絵はまた變つて、林之助  
と自分とが日傘をさして、のどかな春の日の両国橋を睦まじそう  
に手をひかれて渡つてゆく……。

それが悲しいか、怖ろしいか、氣味がいいか、嬉しいか、お絹  
もそれをはつきりと意識するには、頭が余りにぼんやりしていた。  
「もう一度お茶を飲みませんか」と、お君が声をかけた。

お絹は又もや微妙にうなずいた。薬を飲まされて、あたりが少し明かるくなつたように思われた。彼女は肱ひじについて試みに起き直つたが、もう眩暈めまいがするようなことはなかつた。さつきは舞台で蛇を頸くびに巻いていると、その蛇がだんだんに強く絞め付けて来るように思われて、しだいに眼がくらんで気が遠くなつた。それから楽屋へ運び込まれるまで、彼女はなんにも知らなかつたのである。多年可愛がつて使い馴らしている蛇が自分を絞める筈がない。まったく暑気あたりで眼が眩くらんだものだど、お絹はその当時のありさまをおぼろげな記憶の中から呼び出した。

「もう何ともありませんか」と、お花も摺り寄つて訊いた。

「もう大丈夫、みんなもびっくりしたろうね。堪忍しておくれよ」

と、お絹は案外にはきはきした声で言った。

「歩いて帰れますか。駕籠でも呼んでもらいましょうか」と、お花はまた訊いた。

「そうねえ」

お絹は鳩尾みずおちをかかえるように俯向きながら考えていたが、ふ

と何物かがその眼先きをひらめいて過ぎたように、きつと顔をあげた。

「なに、もういいだろう。あたし、あるいて帰るよ。すぐそこだもの」

酔いぎめの人のように、まだ何となくふらふらする足元を踏みしめて、お絹は花魁おいらんのような紅い衣裳をぬぐと、肌襦袢は気味

の悪いほどに冷たい汗にひたされていた。お君にからだを拭かせ  
て、島田を解いて結び髪にして、銅盥かなだらの水で顔を洗つて、彼  
女は自分の浴衣に着かえた。ほかの者もみな帰り支度をした。あ  
と片付けをしている豊吉だけを楽屋に残して、女たち四人は初め  
て外の風に吹かれた。

残暑は日の中のひとしきりで、暮れつくすと大川端には涼しい  
夕風が行く水と共に流れていた。高く澄んだ空には美しい玉のよ  
うな星の光りが、二つ三つぱつちりとかがやいて、十四日の月を  
孕はらんでいる本所ほんじよの東の空は、ぼかしたように薄明かるかった。  
川向うの列び茶屋ではもう軒提灯に火を入れて、その限りない蠟  
燭の火影が水に流れて黄色くゆらめいているのも、水辺の夜らし

い秋の気分を見せていた。

「じゃあ、お大事に……。あしたまた……」

お辰とお花はお絹に挨拶して別れた。お花は帰りに深川のお若の家へ寄って、病氣の様子をみて来ると言った。

「そうしておくれよ。あたしだって又なんどき倒れるか知れないから」

お絹はお君に蛇の箱を持たせて本所の方へ行きかけたが、すぐに立ち停まって明るい広小路の方をあじ頤で指し示した。そうして、両国橋の方へ引つ返すと、お君も素直に黙って付いて行った。外の涼しい風に吹かれてお絹は拭ったようにさわやかな気分になったが、それでも足元はまだ何となくふら付いているので、時どき

に橋の欄干によりかかつて、なにを見るときもなしに川のおもてを見おろしていた。一体どこまで行くつもりか、お君にはちよつと見当が付かなかつた。

橋を渡り尽くしてお君も初めてさとつた。お絹は列び茶屋の不二屋じやを目指しているらしく、軒提灯の涼しい灯のあいだを横切つて通つた。まだ宵ながらそこらには男や女の笑い声がきこえて、麦湯むぎゆの匂いが香ばしかつた。不二屋の軒提灯をみると、お絹は火に吸い寄せられた灯取虫ひとりむしのように、一直線にその店へはいつて行つた。ふたりは床しょうぎ几に腰をかけると、若い女が茶を汲んで来た。それが娘のお里でないことはお絹も知っているので、さらに身をねじ向けて店のなかを窺うと、お里はほかの客となにか笑い

ながら話をしていた。

お里はことし十八で、とかくにいろいろの浮いた噂を立てられ易いここの茶屋娘のなかでも、初心うぶでおとなしい女という評判を取っていることは、お絹もかねて聞いていた。林之助は今年二十歳たちになるけれども、まるで生息子きむすこのようなおとなしい男であった。おとなしい男とおとなしい女——お絹は林之助とお里とを結びつけて考えなければならなかった。彼女は黙って茶を飲みながら、絶えず後目しりめづかいをして、お里の髪形から物言いや立ち振舞いをぬすみ見ていた。

「たいへんに涼しくなりましたねえ」と、お君はわれ知らずに口から出たように言った。

ことしは残暑が強いので、お絹もお君もまわりの人たちもみな白地を着ていた。その白い影がなんとなく薄ら寂しく見えるほどに、今夜の風は俄かに秋らしくなった。

## 三

お絹は茶代を置いて床几を立った。

「もうちつとそこらをぶら付いて見ようじゃないか」と、彼女は  
お君を見返った。「それにしてもお腹なかがすいたね。家うちへ帰つても  
仕様がなから、そこらで鰻うなぎでも食べようか。つまらないことを  
考えていると人間は痩せるばかりだ。ちつと脂っこい物でも食べ

て肥ふとろうじやないか」

「あら、姐さん肥りたいの」と、お君は暗いなかで驚いた顔をしているらしかった。

「お前も肥るほうがいいよ。あたしのように痩せつぽちだと、さつきのように直きにぶつ倒れるよ」

こう言ううちにもお絹の眼には、小肥りに肥ってやや括くくれ頤あごになつてゐる若いお里の丸顔がありありと映つた。地藏眉の下に鈴のような眼をかがやかしている人形のような顔——それがお絹には堪まらなく可愛く思われると同時に、堪まらなく憎いものにも思われた。

「何だつてあたしは、あいつの顔をわざわざ見に行つたんだろう」

ひよつとすると、そこに林之助を見つけ出すかも知れないと思わなくてもなかったが、お絹はそれよりもまずなんとなくお里の様子が見たかったのであつた。見てどうするということもない。

まさかに喧嘩を売るわけにもいかない。大儀たいぎな足を引き摺つて長い橋を渡つて、飲みたくもない茶を飲みに来たのは、自分ながら馬鹿ばかしいようにも思われた。お絹は列び茶屋や夜店の前を通りぬけて、広小路最寄もよりの小さい鰻屋の二階へあがつた。

「もう気分はすっかりいいんですか」と、お君はまた訊いた。

「ああ、もう大丈夫だよ」

お君に酌をさせて、お絹は酒を飲んだ。酒は舌に苦にがいようで味がなかった。やっぱりからだがよくないのかしら——こう思うと、

彼女はそぞろに寂しくなった。女が二十二にもなつて、ほとんど人まじりも出来ないような、こんな稼業をしていて、末はどう成り行くことであろう。去年の冬、林之助と別れてから、お絹はめつきりと肉の衰えを感じるようになった。さっきのようなことがたびたび続いたら——と、彼女はうしろの壁に映る自分の痩せた影法師かげぼうしを思わず見返らねばならなかつた。

燭台の蠟ろうは音もせずろに流れた。あしたの十五夜の用意であろう、小さい床の間にはひとたばの薄すすきが生けてあつて、そのほの白い花のかげには悲しい秋が忍んでいるように思われた。お絹はいよいよ寂しくなつた。

「君ちゃん。なんだか陰気だから、そこの窓をおあけよ」

お君があけた肱掛け窓から秋の夜風は水のように流れ込んだ。となりの露地口の土蔵の白壁は今夜の月に明かるく照らされて、屋根の瓦には露のようなものが白く光っていた。お絹は林之助がほつく発句を作ることをふと思い出した。あしたの晩は月を観て「名月や」などとしき頻りに首をひねることだろうと可笑おかしいようにも思われた。それとなくお里と約束して、どこへか月見にでも行くだろうかと、急に腹立たしくもなった。

こんな子供を相手にしても仕方がないと思いつながら、お絹はおみくじを探るような気でお君に訊いてみた。

「お前、林さんが不二屋へ行くと思うかい。そうして、あのお里さんと仲よくしていると思うかい」

「そんなこと知りませんわ」と、お君は食べかけた鰻のしつぽを口から出したり入れたりしながら答えた。「だけれども、そんなことはないでしょう。誰だって本当に見た人はないんですもの。お花さんは誰のことでもそう言うんですから」

お花にそんな癖のあることは事実であつた。男と女とが少し馴れなれしく詞ことばをかわしていると、お花は必ずこれを意味ありげに解釈しなければ気が済まなかつた。林之助とお里との名を結びつけて、お絹の前に黒い影を投げ出したのもお花が第一の口切りであつた。しかしお花が自分に対してそんな無責任な嘘をつこうとは、お絹もさすがに信じられなかつた。

「嘘ですよ。きつと嘘ですよ」と、お君は鰻をのみ込んでしまつ

てまた言った。

子供は正直である。正直なお君の口からこういう保証の詞ことばをかされて、お絹は頼りないなかにも何だか心強いようにも感じた。苦にがい酒も無理に飲んでいるうちに幾らか酔いがまわつてきて、自分ひとりでくよくよ考えていても詰まらないというような浮いた気も起つた。このあいだから自分の小屋へ足ちかく見物にくる若旦那ふうの男があつて、それは浅草の質屋の息子だとお花が話したことも思い出された。その男もまんざらの男振りではないなどとも考えた。自分が舞台から情じょうのこもつた眼を投げれば、かれを捕虜とりこにすることはさのみむずかしくもないというような、一種の誇り心も起つた。そうは思つても、やはり林之助が恋しかつた。

お絹とお君が夜露にぬれて一つ目の家へ帰り着いたのは、その夜の五つごろ（午後八時）であつた。家には毎日留守番をたのむ隣りのお婆さんが眠そうな眼をして待っていた。お婆さんはお土産の折おりを貰つて喜んで歸つた。

「君ちゃん。戸をお閉めよ。もうすぐに寝ようじゃないか」

「はい」

お君は素直に格子を閉めにいった。お君は近所の大工の娘で、家の都合がよくないのと、現在の母は生みの親でないのとで、去年からお絹の家うちへ弟子とも奉公人とも付かずに預けられているのであつた。継ましい母の手に育てられただけに、年の割には何かとよく気が付くので、お絹も彼女を可愛がつていた。

「お寝やすみなさい」

眠い盛りのお君は床にはいると直ぐに又たたき起された。寝ぼけまなこを擦こすりながら格子をあけて出ると、外には若い男が忍ぶように立っていた。隣りと隣りとの庇ひさし合あわいから落ち込んでくる月のひかりを浴びて、彼の横顔は露を帯びたように白く見えた。

「あら、林さん」

「たいへんに早寝だね」と、林之助は笑っていた。「姐さんはもう寝たのか」

お君にあとを閉めさせ、林之助はずっと奥の六畳へ通ると、お絹はもう寝床から脱け出していた。

林之助は主人の使いで割わり下げ水すいまで来たので、その帰りにちよ

つと寄つてみたのだと言つた。お君が火消し壺からまだ消えない火種を拾い出して来ると、林之助はとりあえず一服すつた。

「どうしたい。顔の色が悪いじゃないか」

「きようは舞台上で倒れたの」

「そりやあいけない。どうしたんだ」

「なに、すぐに癒つたの。やつぱり暑気あたりだつてお医者さんが  
う言つて……」

「なにしろ、大事にするがいいぜ。悪いようならば無理をしないで、二、三日休んで養生した方がいいだろう」

「いいえ、それほどでもなからうと思つているの。いつそひと  
思いに死んだ方がいいかも知れない」

こんな問答をしているうちにも、お絹は眼にみえない何物をか相手の顔色から見いだそうと努めているように、絶えずその顔をじつと見つめていると、男は女のひとみを恐れるように行燈あんどうの暗い方へ眼をそむけていた。

女はこの頃の無沙汰について正面から男を責めようとしなかった。男も言いそくれたようなふうで、自分からはなんにも言ひ出さなかつた。お絹は長い煙管きせるでしずかに煙草をすっていた。

「あたし、考えると、さつきあのまままで死んでしまった方が仕合せだったかも知れない。生きていたところで、あんまり面白い世の中でもなし、ひと思いに死んでしまった方が未練が残らなくつていい」

ふた口目には死にたいと繰り返して言うお絹の料簡りようけんを、林之助も大抵は察していた。そんなことを言つて自分の気を引いて見るのだということは能く判つていた。ここでうつかりした返事をする、それを言いがかりに執念深く絡からみついて来るお絹のいつもの癖を知っている彼は、なるべく逆らわないように避けているのを唯一の楯たてと心得ているので、今夜もおとなしく黙つて聞いていた。

「君ちゃん。お酒は無いかい」と、お絹は次の間へ声をかけた。「いや、そうしちやあいられない。もうすぐに帰らなけりやあならないんだ。あんまり無沙汰をしているから、唯ちよいと寄つて見たのさ。もう五つ過ぎだ。早く帰らなけりやならない。御用ごように

人がなかなかやかましいから」と、林之助は煙草をそろそろ仕舞いかかった。

「それだから屋敷者は忌<sup>いや</sup>さ。あたしがあんなに止めたのに、お前さんなぜ行つたの。御用人に叱<sup>ち</sup>られたつて構<sup>かま</sup>わない。屋敷をしくじるように、あたしはふだんから祈<sup>いの</sup>っているんだから」

「冗談じゃあねえ」と、林之助は仕方なしに笑つた。「いつも言う通り、おれも侍の子だ。いつまでもお前の厄介になつて唯ぶらぶらしているのもあんまり口惜<sup>くや</sup>しい、どうにかまあ自分だけの身<sup>み</sup>じんまくは自分でしなけりやあならないと思つて、窮屈な屋敷奉公も我慢しているんだ。おれの料簡も今にわかる。まあ、お互いにもう少しの辛抱だ」

「へん、久しいものさ」

お絹は煙管を取つて又すい始めた。そうして、横眼で男の顔をじろじろ眺めていた。その蛇のような眼が男にはおそろしかつた。

お絹は色の青白いほそおもて細面で、長い眉と美しい眼とをもつてい

た。林之助も昔はその妖艶なひとみの力に魅せられたのであつた。しかもだんだんと深く馴染むに連れて、殊に一つの屋根の下に朝夕一緒に暮らすようになってから、彼女の妖艶な眼の底に言い知れぬ一種のおそろしい光りの忍んでいることを林之助は漸く発見した。自然の生まれ付きか、あるいは多年もてあそんでいる蛇の感化か、いずれにしてもお絹が蛇のようなものすご凄愴い眼をもつていみどしることは争われなかつた。お絹が天明五年巳年の生まれであると

いうことも思いあわされて、林之助は迷信的にいよいよ怖ろしくなった。彼がふたたび窮屈の武家生活に立ち戻ろうと思ひ立つたのも、実はこの怖ろしい眼から逃がれようとするのが第一の目的であった。

しかし林之助は、彼女の怪しい眼を恐れると同時に、彼女のあたたかい情けを忘れるほどの不人情者ではなかつた。彼はお絹を振り放そうとは思わなかつた。さりとして余りに接近するのも不安であつた。つづめて言えば、不即不離つかずはなれずというような甚だあいまいな態度で、二人の關係を相変らず繋ぎ合せて行こうと考えているのであつた。恋に対してこうした不徹底な態度を取るといふことは、決して相手を満足させる方法ではなかつた。お絹の胸に

いろいろの疑いや妬みの芽をふくのも無理ではなかった。

今夜もそのおそろしい眼と向き合っている。

林之助が努めて相手の視線の外に逃がれ出ようと顔をそむけているのも、彼としてはまことによんどころない事情であった。それが久し振りで逢ったお絹にはなんだか物足りないような、疑わしいもののように思われてならなかった。

二人は又しばらく黙っていた。縁の下では虫の声がかきこえた。

#### 四

「林さん。お前さん、お互いにこうしては詰まらないと思

いでないかえ」

お絹はしずかに煙管をはたきながら、またしても男のこころを探るような疑いぶかい眼をして訊いた。林之助もまともに向き直らないわけにいかなくなつた。

「つまる、つまらないの論じやない。いつも言う通り、今が互いの辛抱どきだ。そりやあこうして離れていれば、おれだつて寂しいこともある。お前だつてああ詰まらないと思うこともあるだろう。しかしそこが辛抱だよ。おれだつていつまでこうしちやあいない。そのうちにはだんだん出世して きゆうにん 給 人 ようにん か用人になれまいものでもない。そのあかつきにはお前を引き取るとも、又おまえが窮屈でいやだと言うならばそつと何処へか囲つて置くとも、

そりやあ又どうにでも仕様があらうというものじゃあねえか」

林之助の言うことは大<sup>だい</sup>道<sup>どう</sup>うらないの講釈のように嘘で固めていた。彼の奉公している杉浦中務の屋敷は六百五十石で、旗本のうちでもまず歴々の分に数えられているので、用人や給人はすべて譜代<sup>ふだい</sup>である。渡り奉公の中小姓などが並大抵のことでその後釜に据われる訳のものではない。林之助も無論それを知らない筈はなかつたが、この場合、まずこんなことでも言つて女の手前をつくろつて置くよりほかはなかつた。

そうした気休めはもう幾たびか聞き慣れているので、お絹も身に沁みて聞こうとはしなかつた。しかしそんな見え透いた嘘をついてまでも、自分の機嫌を取るように努めているらしい男の心は、

やはり憎くなかった。

「だけど、お前さん。歴々のお旗本の御用人さまが両国の橋向うの蛇つかいを御新造ごしんぞにする。そんなことが出来ると思つているの」「表向きは無論できねえ理屈さ。だが、一旦綺麗に足を洗つて置いて、それから担当の仮親かりおやを拵こしらえりやあ又どうにか故事こじつけられるというものだ。又それが小面倒こだとすれば、今も言う通りどこへか囲つておく。つまり二人が末長く添い通せりやあ、それで別に理屈はねえ筈だ」

これも去年の冬から何度繰り返しているか判らない。お絹も何度聞いているか判らない。二人が顔を突きあわせれば、いつもこの同じような問題を中心にして、男は的あてになりそうもないことを

言い、女も的にならないことを知りながら渋々納得なつとくしている。その間には言い知れない悩みと寂しさを感じていながらも、お絹は切るに切れない糸に引き摺られていた。

今夜のお絹には、まだほかに言いたいことがあつた。列てしび茶屋のお里のことが胸いっぱいにつかえていながらも、確かな手証てしようを見とどけていない悲しさには、さすがに正面から切り出すのを差し控えていなければならなかつた。それでも、何とかしてこの新しい問題を解決した上でなければ、男を今夜このままに帰したくないので、彼女はだまって俯向きながら、林之助を無理にひきとめる手だてをいろいろに工夫していた。

男も立端たちばを失つたように、一度しまいかかつた袂たもと落おとしの煙

草入れを又あけて、細い銀煙管から薄いけむりを吹かせていたが、その吸い殻をぽんと叩くのをきっかけに、今度は思い切つて起ちあがつた。

「まあ、からだを大事にするがいい。又近いうちに来るから」

「列び茶屋へばかり行かないでね、ちつとこつちへも来てくださ  
いよ」

思い余つたお絹の口から忌味いやみらしいひと言がわれ知らずすべり出ると、林之助は少し顔をしかめて立ち停まつた。

「列び茶屋へ行く……。誰が」

「お前さんがさ。みんな知っているよ」

乗りかかった船で、お絹もこう言つた。

「へん、つまらねえことを言うな」

問題にならないというような顔をして、男はすたすた出て行くとした。

そのうしろ姿をじつと見つめているうちに、お絹は物に憑つかれたように俄かにむらむらと気が昂たつて来た。彼女は不意に起ちあがつて長火鉢の角につまづきながら、よろけかかつて男の肩にしがみついた。

「林さん。おまえさん、ずいぶん薄情だね」

だしぬけに鋭いヒステリックの声を浴びせられて、気でも違いはしないかというように、林之助は呆あっけ気にとられた顔をしてお絹をみると、彼女のものすごい眼は上吊うわづつていた。その声はもう嘎か

れていた。

「お前さん、あたしというものをどうして呉れるつもりなの。おまえさんを屋敷へやった以上は、どうで二人のあいだに長い正月のないことはあたしも大抵あきらめていたけれども、目と鼻の広小路へ来て列び茶屋の娘とふざけ散らしている。そんなことをされて、おとなしく見物しているあたしだと思つていいのかえ」と、お絹は早口に言った。「いつもいう通り、蛇は執念ぶかいんだから、そう思つておいでなさいよ」

「列び茶屋の娘……。そりやあ思いもつかねえ濡衣ぬれぎぬだ。なるほど友達のつきあいで、列び茶屋の不二屋へ此このじゆう中ちよいちよい遊びに行つたこともあるが、なにも乙からに絡からんだことを言われるよ

うな覚えはねえ。こう見えてもおれは大川の水、あつさりと清いものだ」

「悪くお洒落でないよ」と、お絹は男の肩を一つ小突いた。「お前さんが不二屋のお里とトチ狂っていることは両国でみんな知っているんだよ。さあ、これからあたしと一緒に不二屋へ行つて、あたしの眼の前でお里と手を切つておくれ」

林之助はいよいよ煙けむにまかれた。彼が友達と一緒にこのごろ列び茶屋へ入り込むことは事実であつた。不二屋のお里とも馴染みであつた。しかしどう考えてもお絹からこんな難題を持ち掛けるような疚やましい覚えはなかつた。

「馬鹿だな。誰かにしゃくられたと見える」と、林之助はなまじ

言い訳をしない方が却って自分の潔白を証明するかのよう、ただ軽く笑っていた。

それでもお絹はどうしても肯きかなかつた。彼女はまったく気でも違つたように男にむかつて遮しやにむに二無二食つてかかつて、邪じゃが非ひでもこれから不二屋へ一緒に行けと言つた。彼女の蛇のような眼はいよいよものすごくなつて、眼尻には薄紅い血がにじんで来たように見えた。言い訳するよりも、なだめるよりも、林之助は一刻も早くこの怖ろしい眼から逃がれなければならなかつた。彼は挨拶もそこそこにして、おびえた心をかかえながら格子の外へ逃げように出て行つてしまつた。

「あれ、姐さん」

跣足はだしで追つて出ようとするとお絹を、お君はころげるように駈けて来て抱き止めた。

「姐さん、お待ちなさいよ。林さんはもう遠くへ行つてしまつたわ」

お絹は燃えるような息をついて土間に突つ立つていた。

「姐さん、嘘よ、嘘よ。お花さんの言うことはみんな嘘よ。林さんはなんにも知りやあしないのよ。列りび茶屋の娘なんて皆んな嘘よ。きつと嘘に相違ないのよ」

嘘という字を幾つも列べて、お君はおどおどしながらも一生懸命にお絹をなだめようとすると、お絹は解けかかった水色の細紐しごきを長く曳きながら、上がりがまち框へくずれるように腰をおとした。

「寝衣ねまきのまんまでこんなところにいると悪いわ。早く内へおはいんなさいよ」

台所から雑巾ぞうきんを持って来て、お君はお絹の足を綺麗に拭いてやつて、六畳の寝所ねどころの方へいたわりながら連れ込んだ。お絹は枕を抱えるようにして蒲団の上に俯伏したが、その痩せた肩に大きい波を打っているのを、お君は不安らしく眺めていた。

「さっきのお薬をあげましょうか」

「いいよ、いいよ。あたしに構わずに寝ておしまいよ」と、お絹はうるさそうに俯向きながら言った。

お君は起つて格子を閉めに行つたが、やがて引つ返して来てお絹の枕もとに坐つた。縁の下でじいじいと刻んでゆくような虫の

声が又もや耳についた。どこかの隙き間から忍び込んで来る夜の冷たい風に、行燈のうす紅い灯が微かにちろちろと揺らめいて、瘦せおとろえた秋の蚊がその火影に迷っていた。

「もうお前、お寝よ。あしたの朝、眠いから」

「あだし、今夜は起きていますわ」

「あたしはもういいんだよ」

「でも、こんなに癩がたつていて、どんなことがあるかも知れませんがせんもの。姐さん、ほんとうにからだを大事にしてくださいよ」

「いいよ、判っているよ」と、お絹は邪慳じゃけんに叱りつけた。

叱られてもお君はまだそこにしよんぼりと坐っていた。露地のなかで犬の声がかきこえたので、もしや林之助がまた引返して来

たのではないかと、お君はそつと起つて行つて雨戸の外に耳を澄  
ましたが、犬の声はしだいに遠くなつて、溝どぶ板いたの上には誰も忍  
んでゐるような気配もきこえなかつた。

「誰か来たの」と、お絹は急に顔をあげた。

「いいえ」と、お君は枕もとへそろそろとまた戻つて来た。

「お前、いい加減にしてお寝よ」

「ええ」と、お君はまだ渋つていた。

「言うことを聞かないと承知しないよ」

枕をつかんで叩き付けそんな権幕をみせても、お君はまだ強情  
に動かなかつた。黙つて坐つてゐる彼女の小さい眼からは白いし  
ずくがほろほろと流れてゐた。それを見ると、お絹は急に堪まら

なくなつたように、蒲団の上から滑り出してお君のからだを横抱きにしつかりと抱えた。

「君ちゃん、堪忍しておくれよ。あたし、この頃は時どきに癩が起るんだからね。もうなんにも叱りやあしないよ。ね、ね、いいだろう。これからはいつまでも仲よくしようね」

お君の濡れた顔をじつと見つめながら、お絹は自分も子供のようにしくしくと泣き出した。なんとも言い知れない悲しさが胸の底から滲み出して、お君も抱かれながらに啜り泣きをやめなかつた。

お絹のおそろしい眼から逃れた林之助は、大川端おおかわばたまで来て初めてほっとした。十四日の大きい月はなかぞらに真ん丸く浮き上がって、その影をひたしている大川の波は銀しろがねを溶かしたように白くかがやきながら流れていた。長い橋の上には、雪駄せったの音もしないほどに夜露がしつとりと冷たく降りていた。林之助はそのしめった夜露を踏んで急ぎ足に橋を渡って行つた。

「門番のじじいにまた忌いやな顔をされるのか」

そんなことを考えながら林之助は広小路へ出ると、列び茶屋でももう提灯をおろし始めたときみえて、どこの店でも床几を片づけていた。玉蜀黍とうもろこしや西瓜や枝豆の殻からが散らかつているなかを野良

犬がうろうろさまよっていた。

「今晚は。今お帰りでございますか」

自分の前をゆく若い女がふと振りむいて丁寧ていねいに挨拶したので、林之助も足を停めてよく見ると、女は不二屋のお里であった。

「やあ、今晚は。里さあちゃんの家うちはこつちへ行くの」

「ええ、外神田で……」

向柳原へ帰る男と外神田へ帰る女とは、途中まで肩をならべて歩いた。お絹から思いもよらない疑いを受けている林之助は、こうして夜ふけにお里と繋がって歩いていることが何だか疚やましいように思われてならなかった。しかし先方から馴なれなれしく近寄やまつて来るものを、まさかに置き去りにして逃げて行くほどの野暮やまに

もなれなかつた。二人は軽い冗談などを言いながら連れ立って歩いた。

「いいお月さまですことね」と、お里は明るい月をさも神々しいもののように仰いで見た。

「ほんとうにいい月だ。あしたのお月見はどこも賑やかいだらう。里ちゃんも船か高台か、いずれお約束があるだらうね」

「いいえ、家がやかましゆうござんすから」

家がやかましいのか、本人の生まれ付きか、とにかくにお里が物堅い初心うぶな娘であることは林之助も認めていた。彼はお絹の妖艶な顔と、お里の人形のような顔とを比較して考えた。執念ぶかそうな蛇の眼と、無邪気らしい鈴のような眼とを比較して考えた。

そうして、なんにも知らずに人から呪われているお里が気の毒にも思われた。

お絹は今夜自分を不二屋へ引き摺って行って、彼女の見る前でお里と手を切らせると言った。勿論、それは一時の言い懸りではあろうが、もし果たしてその通りに二人が不二屋へ押し掛けて行ったら、お里は一体どうするであろう。それを考えると、林之助はおかしくもあり、また気の毒でもあった。そのお里はなんにも知らずに自分と一緒にあるいている。人目には妬ねたましく見えそうなのこの姿を、お絹が見たらなんと思うであろう。林之助は自分のうしろから蛇の眼がじつと覗いているようにおののかれて、俄かにあたりを見まわすと、明るい月は頭の上から二人をみおろして、

露の沁み込んだ大道の上に二つの影絵を描いていた。夜ももう更けているらしかった。

「いつも一人で帰るの」

「いいえ」

列び茶屋の或る家に奉公しているお久ひさという女がやはりお里の近所に住んでいるので、毎晩誘いあわせて一緒に帰ることにしていたが、きようはその女が店を休んだので、お里は連れを失って寂しく帰る途中であつた。彼女が顔馴染みの林之助に声をかけたのも、ひつきようは帰り途のさびしいためであつた。この頃、柳原の堤とてに辻斬りが出るといふ物騒な噂うわさがあるので、お里はそんなことを言い出して足がすくむほど顫ふるえていた。しかしそれは闇夜

のことで、昼のように明るい月夜に辻斬りなどがめつたに出るものではないと、林之助は力をつけるように言い聞かせた。向柳原へ帰る彼は、堤の中途から横に切れて、神田川を渡らなければならなかった。

「わたしはあっちへいくんだから、ここでお別れだ。まあ気を付けて……」

「はい。ありがとうございます」と、お里は頼りないような声で挨拶した。

それが何となしに哀れを誘って、林之助はいつそ彼女の家まで一緒に送って行ってやろうかとも思ったが、自分も屋敷の門限を氣遣っているので、このうえ道草を食っているわけにはいかなか

った。そのままお里に別れて橋を渡り過ぎながらふと見かえると、堤の柳は夜風に白くなびいて、稲荷のやしろの大きい銀杏いちようのこずえに月夜鴉がらすが啼いていた。白地の浴衣を着て俯向き勝ちに歩いてゆくお里のうしろ姿が、その柳の葉がくれに小さく見えた。

五、六間もゆき過ぎたかと思うと、あずま下駄のあわただしい音が、うしろから林之助を追つて来た。振り向いてみると、それはお里であつた。彼女は林之助にわかれると急に寂しく心細くなつたので、ちつとぐらい廻り路をしてもいいから、自分も柳原堤をまっすぐに行かずに、林之助と一緒に向柳原へまわつて、それから外神田へ出ようというのであつた。ふたりはまた一緒にあるき出した。

「しかし、向柳原まで来ちやあ余程の廻り路になる。じゃあ、いっつそわたしがお前の家まで送つてあげよう」と、林之助も見かねて言い出した。

お里も初めは辞退していたが、しまいには男の言うことをきいて、外神田の家まで送つて貰うことになった。月はいよいよ冴え渡つて、人通りの少ない夜の町をさまよっているたつた二人の若い男と若い女をあざやかに照らした。ふたりの肌と肌は夜露にぬれて、冷たいままに寄り添つてあるいた。あるく道々で、お里は自分の身の上などを少しばかり話し出した。

お里は不二屋の娘ではなかった。不二屋の株を持っている婆さんはもう隠居して、日本橋の或る女が揚げ銭で店を借りている。

お里はその女の遠縁に当るので、おととしの夏場から手伝いに頼まれて、外神田の自宅うちから毎晩かよっているが、内気の彼女は余りそんな稼業を好まない。自宅にはお徳という母があつて、これも娘に浮いた稼業をさせることを好まないのであるが、幾らか稼いで貰わなければならぬ暮らしむきの都合もあるので、仕方がなしに娘を両国へ通わせている。七年前に死んだ惣そうり領ようの息子が今まで達者でいたらとは、母が明け暮れに繰り返す愚痴であつた。

「よけいなお世話だが、早くしつかりした婿でも貰つたらよさそうなもんだが……」と、林之助は慰めるように言つた。

「なんにも株家督かぶかどくがあるじゃなし、なんでわたくしどものような

貧乏人のところへ婿や養子に来る者があるもんですか」と、お里はさびしく笑った。「自分ひとりならば、いつそ堅気の御奉公にでも出ますけれど、母を見送らないうちはそうもまいりません」

お里の声は湿うるんできこえたので、林之助はそつと横顔を覗いてみると、彼女は月の光りから顔をそむけて袖のさきで眼がしらを拭いているらしかった。おとなしい林之助の眼にはそれがいじらしく悲しく見えた。そうして、こういう哀れな娘を呪のろっているお絹の狂人染みた妬みが腹立たしいようにも思われて来た。

不二屋へ毎晩はいり込む客の八分通りは皆んなこのお里を的まとにしているのであるが、彼女がこうした悲しい寂しい思いに沈んでいることは恐らく夢にも知るまい。現に自分を誘ってゆく諸屋敷

の若侍たちも「どうだ、いい旦那を世話してやろうか」などとききからかっている。自分も毒にならない程度の冗談をいつている。お里は丸い顔に可愛らしいえくぼをみせて、いい加減に相手になつてゐる。

それは茶屋女の習いと林之助も今まで何の注意も払わずにいたが、今夜は彼女の身の上話をしみじみと聞かされて、もううつかりと詰まらない冗談も言えないような氣になつて、林之助もおのずと真面目な話し相手にならなければならなくなつた。

二人の話し声はだんだんに沈んでいった。問われるに従つてお里はいろいろのことを打ち明けた。七年前に死んだ兄のほかには、ほとんど頼もしい身寄りもないと言つた。不二屋のおかみさんも

遠縁とはいえ、立ち入って面倒を見てくれるほどの親身の仲でもないと言った。母は賃仕事ちんじごとなどをしていたが、それも病身で近頃はやめていると言った。お里の話は気の弱い林之助の胸に沁みるような悲しい頼りないことばかりであった。

林之助は自分とならんでゆくお里の姿を今更のように見返った。紅あかいきれをかけた大きい島田髷まげが重そうに彼女の頭をおさえて、ふさふさした前髪にはさまれた鬘べっこう 甲の櫛やかんざしが夜露に白く光っていた。白地の浴衣ゆかたに、この頃はやる麻の葉絞りの紅い帯は、十八の娘をいよいよ初ういらい々しく見せた。林之助はもう一度お絹とくらべて考えた。お里はとかく俯向き勝ちに歩いているので、その白い横顔を覗くだけでは何となく物足らないように思われた。

「どうもありがとうございました。さぞ御迷惑でございましたらう」

外神田まで送り付けて、路の角で別れるときにお里は繰り返して礼をいった。自分の家はこの横町の酒屋の裏だから、雨の降る日にでも遊びに来てくれと言った。それがひと通りのお世辞ばかりでもないように林之助の耳に甘くささやかれた。まんぎらの野暮でもない林之助は阿母おっかあに好きなものでも買ってやれといって、いくらかの金を渡して別れた。お里は貰った金を帯に挟んで、幾たびか見かえりながら月の下をたどって行った。

お里に別れて林之助は肌寒くなった。夜もおいおいに更けて来るので、彼は向柳原へ急いで帰った。帰る途中でも、お絹とお里

の顔がごつちやになつて彼の眼のさきにひらめいていた。

「お絹に済まない」

お絹の眼を恐れている林之助は、お絹の心を憎もうとは思わなかつた。彼は義理を知つていた。彼はお絹の濃こまやかな情を忘れることは出来なかつた。お絹はとかく苛いらいらして、ややもすると途方もない気違い染みた真似をするのも去年の冬以来のことでは、つきり自分が彼女の家を立ち退いてからの煩らいである。現にきようも舞台上で倒れたという。林之助は近頃彼女のところへちつとも寄り付かなかつた自分の不実らしい仕向けかたを悔まずにはいられなかつた。無論、屋敷の御用も忙がしかつた。友達のつきあひもあつた。しかし無理に遣やり繰くればどうにか間ひまのぬすめないこ

ともなかつた。

ひとにむかつて何と上手に言い訳をしようとも、自分の心にむかつては立派に言い訳することができないような、うしろ暗い自分の行ないを林之助は自分で咎めた。

誰に水をさされたのか知らないが、お絹が飛んでもない疑いや妬みに心を狂わせるというのも、つまりは自分が無沙汰をかさねた結果である。世間には病気の女房をもっている夫もある。大あばたの女と仲よくしている男もある。うす気味の悪い蛇の眼を自分ばかりが恐れて嫌うのは間違っている。これからはまず自分の心を持ち直して、お絹のみだれ心を鎮める工夫をしなければならぬ。自分と、お絹と、蛇と、この三つは引き離すことの出来ない。

い因果であると悟らなければならぬ。そうは思いきわめながらも、林之助がまつげの塵ちりともいふべきは、かのお里の初ういうい々しいおとなしやかな顔かたちであつた。それがなんとなしに彼の目さきを暗くして、お絹一人を一心に見つめていようとする彼のひとみの邪魔をした。

屋敷の門前へ来て再び空を仰ぐと、月は遠い火の見櫓やぐらの上にかかつて、その裾をひと刷毛はけなすつたような白い雲の影が薄く流れていた。こういう景色はよく絵にあると林之助は思った。

十五夜のおくる日は雨になつて、残暑は大川の水に押し流され  
たように消えてしまった。二十九日は打ちどめの花火といふので、  
柳橋の茶屋や船宿では二十日頃はつかからもうその準備に忙がしそうで  
あつたが、五月の陽気な川開きとは違つて、秋の花火はおのずと  
暗い心持ちが含まれて、前景氣がいつも引き立たなかつた。江戸  
名物の一つに数えられる大川筋の賑わいも、ことしはこれが終り  
かと思つと、心なく流れてゆく水の色にも冷たい秋の姿が浮かん  
で、うろうろ船の灯のかずが宵々ごとに減つてゆくのも寂しかつ  
た。

両国の秋——お絹はその秋の衰れを最も悲しく感じている一人  
であつた。十四日の夜以来、林之助は思い出したように足近くた

ずねて来た。しかし、いつもそわそわして忙がしそうに帰って行った。とおか十日のあいだに四日も訪ねて来たが、しみじみと話をするひま間もないように急いで帰ってしまった。

「人焦らしひとじな。いつそ来てくれない方がいい」と、お絹は物足らないような愚痴をいうこともあった。

「来なければ来ないで恨みをいう、来れば来るで愚痴をいう。困ったお嬢さまだ」と、林之助は笑っていた。

まったく林之助の言う通り、どっちにしてもお絹には不足があった。男が屋敷奉公をやめて、再び自分の手許てもとへ戻って来ない限りは、ほんとうに胸の休まる筈はないと自分でも思っていた。男を引き戻したい。お絹は明けても暮れても唯そればかりを念じて

いた。そんなら去年なぜ出してやったかと自分のこころに訊いてみても、確かな返事をうけ取ることが出来なかった。去年は悲しくあきらめて離れた——しかも、いよいよ離れてみると恋い死ぬほどに懐かしくなつて来た——お絹は去年おめおめと男を出してやった自分の愚かな心を、咎<sup>むち</sup>うちたいほどに罵り悔まずにいられなかつた。

「お菓子はいかがです」

五十を二つ三つも越したらしい女が駄菓子の箱をさげて楽屋へそつとはいつて来た。あさつてが花火という二十六日のひる過ぎで、お絹が例の水色の  
をぬいで、中入りに一服すつているところであつた。

「相変らずお市いちか捻ねじ鉄がねだろうね」と、前芸のお若わかしが蒼い顔を突き出した。お若は病気が癒つて五、六日前からようよう舞台へ出るようになったのであつた。

「お前さん、ずいぶん意地が綺麗だね。まだお医者いしやの薬を飲んでゐる癖くせに……」と、そばからお花も摺り寄つて来た。そうして、  
「姐さん、いかが」と、笑いながらお絹きぬにきいた。

「たくさん」と、お絹は重そうに頭かぶりをふつた。「けども、みんなが食べるならお食べよ。代は一緒に払つてあげるから、君ちゃん、お前もたんとお食べ」

「どうも御馳走さま」

みんなが一度に挨拶して、お若もお花もお君も、地弾きのお辰

も、樂屋番の豊吉も、麩にあつまつて来る鯉のように四方から菓子  
の箱を取りまいた。菓子売りはここの観世物小屋の樂屋の者  
や列び茶屋の客などを相手に、毎日諸方へ入り込んでいるお此と  
いう女であつた。姐さんの奢りおごといふので、みんながここを先途せんと  
と色気なしに、むしやむしや食つてゐるのを、お絹は箱に倚りか  
かりながら黙つて離れて眺めていた。

「おまえさん、列び茶屋へも行くんだね」と、お花は菓子を食つ  
たあとの指をなめながらお此に訊いた。

「はい。まいります」

「不二屋へも行くだろう」

「はい」

お花はお絹に眼くばせをしながら、なに食わぬ顔でお此にまた訊いた。

「おまえさん、あの不二屋の里さとちゃんという子を知っているだろう」

「おとなしい姐さんでございますね」

「あの子に、このごろ情人いいひとが出来たつてね」

「さあ、そんなことは存じませんが……」と、お此は笑っていた。「向柳原のほうのお屋敷さんだつていうじゃあないか」と、お花も笑いながらカマを掛けた。「おまえさん、毎日行くんだもの、知っているだろう」

お此の返事はあいまいであった。単に向柳原の屋敷者といえは

大勢あるが、お絹の男も向柳原に居ることをお此はかねて知っていた。その男がその不二屋へ遊びにゆくこともお此はやはり知っていた。ここでうっかりしたことをしゃべって、どんな当り障りがなとも限らない。諸方へ出入りする自分の商売上、なるべくこんな問題には係り合わない方が利口だと思つたらしく、お此は巧みにお花の問いを避けて、あさつての花火の噂などを始めた。

さつきから少しく眼の色の變つていたお絹は、もう焦れつたくて堪まらないという気色で、倚りかかっていた箱をかかえながら衝と立つて、お此の膝の前に詰め寄るように坐つた。

「お此さん」

その権幕が激しいので、相手はうろたえた。

「は、はい」

「向柳原といえば大抵判っているだろう。あたしのところの林さんのことさ。あの人がこの頃むやみに不二屋へ行く。きのうもおとといも、さきおとといも、はいり込んでいたというのが本当かえ。」

そうして、あのお里という子とおかしいというのも本当だろうね」

お此は返事に困ったような顔をしていた。しかし果たして林之助とお里とのあいだに情交わけがあるかないか、そんなことは彼女にも鑑定は付かないらしかった。お此はまったくなんにも知らない  
と正直そうに答えた。

林之助とお里との問題については、お花は初めから情交ありげに吹ふい聴ちようしている一人であった。現にきようも楽屋へ来て、林

之助がこのごろ毎日のように不二屋へはいり込むという新しい事実を誇張的にお絹に報告した。その矢先きへ丁度お此が来あわせたのであるから、並大抵の言い訳ではお絹はどうしても承知しなかつた。

「お此さん。おまえさんも強情を張らないで、知っているだけのことは言っておしまいよ」と、お花もそばから口を出して責めた。「だって、お前さん。あたしがその本人じゃあるまいし、人のことがどうして判るもんですかね。そんな無理なことを……」

半分言うか言わないうちに、お絹は黙ってお此の腕をつかんだ。「あ、姐さん。どうなさるんです。ひどいことを……」

振り放そうともがくお此の痩せ腕を、お絹は挫ひしぐるばかりに片

手でしつかり掴みながら、片手で箱をとんとんと叩くと、穴の中から青い蛇が長い首を出した。お絹はその鎌首をつかんでずると引き出して、お此の鼻の先へ突きつけた。

「さあ、言わないか」

お此は真つ蒼になって口もきけなかった。彼女は死んだ者のようになつて唯ぼんやりしていると、お絹はものすごい眼をしてあげ笑つた。

「じゃあ、隠さずに言うかえ。なんでもいいからお前さんの知っているだけのことを言っておしまいよ」

世にもおそろしい蛇責めに逢つては、お此もしよせん逃がれる術すべはないと観念したらしい。自分の知っているだけのことは何で

も言うから、ともかくもその蛇をしまつてくれと顛えながら頼んだ。

「お前さん、知らない筈がないじゃあないか。お前さんがお里の家のすぐ近所にいるということも、あたしはちゃんと知っているんだよ」と、お絹は嚇すように睨んだ。蛇をつかんでいる手はまだ袂の下に隠していた。

お絹が根ほり葉ほりの詮議に対して、お此も知っているだけのことを何でも答えた。しかし十四日の月を踏んでお里が林之助に送られて帰ったことは、二人のほか知る者はなかった。お此もむろん知っていないかった。

お絹がお此を残酷にさいいなので、ようよう聞き出した新しい事

実は、以前よりもこの頃はお里の店へ林之助が足近く通つて来るというだけのこと過ぎなかつたが、それだけのことでもお絹の胸の火をあおるには十分であつた。

「お此さん、ありがとうよ」と、お絹はわざと落ち着いたような声で言つた。「もうそのほかにお前さんの知つていることはなんにもないんだね」

林之助がどんな着物を着ていたとか、どんな菓子を買つて食つたとか、お里にどんな冗談を言つたとか、茶代は幾らぐらい置いたらしいとか、そんなことまで残らずしやべり尽くしてしまつたお此は、もうこの上はおそろしい蛇を頸くびに巻き付けられても、なんにも口から吐き出す材料はなかつた。

「後ご生しょうですからもう堪忍して下さい。まったく何んにも知らな  
いんですから」と、お此は手を合わせないばかりにして、自分に  
詐いつわりのないことを訴えた。

「もういいでしょうよ。姐さん」

お花も見かねて取りなし顔に言った。自分が先き立ちになつて  
お此を責めたのではあるが、蛇責めのむごい拷ごうもん問には彼女もさ  
すがに驚かされた。

罪のないお此をそれほどに窘いじめるのも可哀そうだと思つたので、  
お花も仕舞いには却つてお絹をなだめる役にまわつたのである。

「あんまり窘めて済まなかつたね。こりやあお菓子かの代だよ」

二朱にしゆの銀かねをお絹から貰つて、お此は又おどろいた。お絹は剩つり銭

はいらないと言った。

「その代りにお前さんにことづけを頼みたいんだがね。不二屋のお里に逢ったらば、これから林さんをいつさい寄せ付けないようにしてくれと、そう言っておくれ。いいかい。よく忘れないようにお里に言っておくれよ。もしこののちも相変わらず不二屋に林さんの姿を見掛けるようなことがあると……」

青い蛇の首がお絹の袂の下から出た。

「あたしはこれを持ってお里のところへお礼に行くからね」

「姐さんばかりじゃない。あたし達も加勢に行くよ」と、お花も一緒になって嚇した。

嚇されてお此はまた縮みあがった。

「冗談じゃあない、本当にこれでお里の頸を絞めてやるから」と、お絹の白い手のさきには蛇の頭が気味悪くうごめいていた。

お此は二朱の銀を頂いて早々に逃げて帰った。

## 七

「まあ、誰から来たんだろうね」

大きい鮓すしの皿を取りまいて、楽屋じゆうの者が眼を見あわせていた。お此が嚇されて帰ったあとへ、木戸番の又またぞう蔵が鮓屋の出前持ちと一緒に楽屋へはいつて来て、お絹さんへいつてその鮓の皿を置いて行つた。

「誰が呉れたの」と、お花が訊いた。

「あとで判りやす」

又蔵は笑いながら行ってしまった。お遣い物の主は結局判らなかつた。しかし、こんなことはさのみ珍しくもないので、みんなは今まで駄菓子をさんざん噛かじつた口へ、さらに鮪まぐろやこはだや海苔巻を遠慮なしに押し込んだ。お絹も無理に勧められて海苔巻を一つ食つた。

「きようは御馳走のある日だったね」と、地弾きのお辰は海苔の付いたくちびるを拭きながら、鉄漿かねの黒い歯をむき出して笑つた。「みんな姐さんのお蔭さ」と、お若も茶を飲みながら相槌あいづちを打つた。

飲み食いの時にばかり我れ勝ちに寄つて来ても、まさかの時には本当の力になつてくれる者は一人もあるまい。お絹はその軽薄を憎むよりも、そうした境遇に沈んでいる自分の今の身が悲しくはか果敢なまれた。小さいときに死に別れたふたおや両親や妹が急に恋しくなつた。

それに付けても林之助がいよいよ恋しくなつた。自分を取りすがつてゆく人は林之助のほかにはない。もうこれからは決して無理も言うまい。我儘も言うまい。どこまでもおとなしくあの人の機嫌を取つて、見捨てられないようにする工夫くふうが専一だと、いつにない、弱い心持ちにもなつた。しかしお里のことを考え出すと、彼女はまた急にいらいら苛々して来た。林之助の見ている前で、お里の

島田齧を邪慳じゃけんに引つつかんで、さつきお此を苦しめたようにその鼻づらへ青い蛇をこすりつけてやりたいとも思った。林之助への面つらあてに、新しい男を見つけ出して面白く遊んでみようかとも思った。

「又ちゃん。なに……」

又蔵によび出されて、お花は楽屋口へ起たつて行つた。二人は何かしばらくささやき合っていたが、やがてお花はにこにこしながら戻つて来た。その時にはお絹はもう舞台に出ていた。

「お花さん。鮎やすけの相手は知れたかね」と、楽屋番の豊吉が食いあらした鮎の皿を片付けながら訊いた。

お花は黙つてうなずいた。

「当ててみようか。浅草の五二屋ごにやさん。どうだい、お手の筋だろう」

「楽屋番さんにして置くのは惜しいね」

うらないしや

「売卜者になつても見料けんりょう五十文は確かに取れる」と、豊吉

はいつもの癖でそり返つて笑つた。

「浅草の大将、だんだんに欺だまを出して来るね。又公が今来てお前

に耳打ちをしていた秘密の段々、これも真正面から凶星を指してみようか。お花さんにまず幾らか握らせて、向島あたりへ姐さん

をおびき出して、ちようど浅草寺せんそうじの入相いりあいがぼうん、向う河岸

で紙砧かみぎぬたの音、裏田圃で秋の蛙かわず、この合方あいかたよろしくあつて幕

という寸法だろう。どうだ、どうだ」

「見料五十文は惜しくない」と、お花は澄まして笑っていた。

「だが、罪だな」と、豊吉は勿体らしく首をひねった。「なぜと言いいえ。取り巻きのおめえ達はそれでよかろうが、姐さんはいひとみごう人身御供だ。そんなことが向柳原へひびいてみねえ。決して姐さんの為にやなるめえぜ」

「姐さんもちつとは浮気をするがいいのさ」

「などと傍そばから水を向けるんだからおそろしい。悪党に逢あつちやあ敵かなわねえな」

「人聞きの悪いことをお言いでないよ」

豊吉の推測はことごとく外はずれなかつた。小屋が閉場かぶつてから、お花はどう説き付けたかお絹を誘い出して向島へ駕籠で行った。

豊吉のいった通り、浅草寺の入相の鐘が秋の雲に高くひびいて、紫という筑波山の姿も、暮れかかった川上の遠い空に、薄黒く沈んでみえた。堤下の田圃には秋の蛙が枯れがれに鳴いていた。

二挺の駕籠が木母寺の近所におろされたときには、料理茶屋の軒行燈に新しい灯のかがが黄色く映っていた。風雅な屋根付きの門のなかには、芙蓉のほの白く咲いているのが夕闇の底から浮いているように見えた。お絹とお花はその茶屋の門をくぐって奥の小座敷へ通されると、林之助と丁度同い年ぐらいの町人ふうの若い男が、女中を相手に杯をとっていた。

「どうも遅くなりました」と、お花は丁寧に挨拶した。

お絹は燭台の灯に顔をそむけて坐った。

女中はなんにも言わずに二人をじろじろ見ながらつんと立つて行つた。その素振りがなんだか自分たちを軽蔑さげすんでいるらしくも見えたので、お絹はまず勃然むっとした。

「それでもよく出て来てくれたね」

男がさした杯をお絹はだまつて受取つて、お花に酌をさせてひと口飲んだ。お花が取持ち顔に何かいろいろの話を仕向けると、男も軽い口で受けた。

男は浅草の和泉屋という質屋せがれの倅で、千次郎という道楽者であった。吉原や深川の酒の味ももう嘗なめ飽きて、この頃は新しい歡樂の世界をどこにか見いだそうとあさっている彼の眼に、ふと映つたのは両国のお絹であつた。彼は自分の物好きに自分で興味を

もつて、この美しい蛇つかいの女に接近しようと努めた。樂屋への遣い物、木戸番への鼻薬、それらもどこおりなく行き渡つて、今夜ここでお絹と膝を突きあわせるまで手順よく運んだのである。彼はかなりに飲める口とみえて、二人の女を向うへまわして頻りに杯をはやらせていた。

男振りもまんざらではない、道楽者だけに容子もようす野暮ではない。お花が頻りに褒めちぎっているのも、あながちに欲心からばかりでもないことをお絹も承知していた。彼女が今夜ここへ呼ばれて来たのも幾分か浮いた心も伴っていないでもなかつた。どうで林之助とは添い通せる仲ではない。殊に男は不二屋のお里の方へとかく引き付けられるようになってゐる。自分だけが人知れずに苦

勞しているよりは、ちつとは面白く浮かれて見るもいいと、自棄やけも手伝った気まぐれから、今夜すなおにお花に誘い出されたのであつた。しかし来てみると、やはり面白くないことが多かつた。

第一には、この家の女中うちたちの素振りが面白くなかつた。かれらは自分の素姓を薄々知つていゝらしく、口へ出してこそ何とも言わないが、蛇つかいの女をさげすむような、忌いみ嫌うような気色をありありと見せていた。自分の商売の立派なものでないことは、お絹自身もむろん承知しているので、彼女も人にむかつて、おのれの身分を誇ろうとは思つていなかつた。しかし、かれらからさげすむような素振りを眼まのあたりに見せつけられると、お絹は堪忍ができなかつた。かれらとても大名高家こうけのお姫さまではな

い。多寡が茶屋小屋の女中ではないか。その女中風情ふぜいに卑しめられるのは如何にも口惜しいと、彼女の癩癩はむらむらと起つた。

それから更に面白くないのは千次郎の態度であつた。なるほど道楽者だけに話も面白い。すべての取りまわしも野暮やぼではない。

しかしその野暮でないのをひけらかすような処に、お絹には堪まらないほど不快の点が多かつた。しよせん彼の胸には、色の恋のと名づけられるような可愛らしいものを持っているのではない。単に一種の変り物を賞しょう翫がんするような心持ちで自分をもてあそばうというに過ぎないことも、お絹にはよく見透かされた。

女中たちに対する不平と、千次郎に対する不快と、この二つがお絹を駆つてしたたかに酒を飲ませた。彼女は大蛇おろちのように息も

つかずに飲んだ。そばに観ているお花は、だんだんに蒼ざめてゆく彼女の顔色に少しく不安を懐<sup>いだ</sup>いて来た。

「あの、お前さん。あんまり飲むと毒ですよ」

「いくら飲んだっていいよ。あたしが飲むんじゃないから」と、眼付きのいよいよ<sup>ものすご</sup>懐<sup>ものすご</sup>惰<sup>ものすご</sup>くなつて来たお絹は、左の手には杯を持ちながら、右の手で袂をいじっていた。

それを見てお花はいよいよ不安に思った。

もしやさっきのお此の二の舞をここで演<sup>や</sup>るつもりではあるまいかと、彼女は少しいざり出てお絹の楯になった。よもやここまで蛇を連れて来る筈もあるまいと思しながら、彼女はそつとお絹の袂を探<sup>さぐ</sup>ろうとすると、お絹は眼をひからせてその手を強く叩きの

けた。

「なにをするんだよ。人の袂へ手をやって……。おまえきんちやつき巾着きんちやく切りかえ」

「なんだ、なんだ。袂に大事の一巻でも忍ばせてあるのか」と、千次郎は笑った。

「ええ、大事なものよ。おまえさんに見せて上げましょうか。あたしの袂に忍ばせてあるのは商売道具の青大将よ」

そばにいた女中たちはきやつと行って飛び上がった。まだその正体を見とどけないうちに、千次郎も顔色を変えて起ち上がった。お絹はあざ笑いながら両方の袂を軽く振ってみせた。

「ほら、ご覧なさい。大丈夫。だが、和泉屋の若旦那。おまえさ

んは随分たのもしくないのね。あたしの商売がなんだということ  
 を今初めて知ったんじゃありますまい。それを承知の上でここま  
 で呼び出して置きながら、蛇と聞くと直ぐに悚毛おぞけをふるって逃げ  
 腰になるようじゃあ、とても末長くおつきあいは出来ませんね。  
 ねえ、花ちゃん。それを思うと、向柳原はやっぱり可愛いところ  
 があるね。なにしろ蛇とあたしと一緒に小こ一年も仲よく暮らした  
 んだからねえ」

お絹はもう行儀よく坐っていられないほどに酔いくずれていた。  
 彼女は片手を畳に突いて、ぐったりと疲れた人のように、痩せた  
 肩で大きい息をついていた。

「ねえ、花ちゃん。向柳原はまったく頼もしいね。家を勘当され

ても、浪人しても、蛇とあたしと一緒に暮らしていたいと言うんだからね。あたしも今夜という今夜つくづく悟つたよ。女がほんとうに可愛いと思う男は、一生にたった一人しか見付からないもんだね。どう考えても浮気はできない。花ちゃん。お前、なんだってあたしをこんな所へ連れて来たんだえ。ええ、くやしい」

彼女はお花の膝にしがみ付いたかと思うと、更にその胸むなぐら倉をつかんで無暗に小突こづきまわした。相手が酔っているのです、お花はどうすることも出来なかつた。女中たちはおどろいて燭台を片寄せた。

「手に負えねえ女だ」と、千次郎は持てあましたように苦笑にがわらいをしていた。

「姐さん。あやまった、あやまった。堪忍、堪忍……」

お花は小突かれながら頻りにあやまると、お絹は相手突き放してすつくと起ちあがった。乱れた髪は黒い幕のように彼女の蒼い顔をどぎして、そのあいだから物凄い二つの眼ばかりが草隠れの蛇のように光っていた。

「あたし、もう帰りますよ。誰がこんな所にいるもんか。駕籠を呼んでくださいよ」

## 八

向島を出たお絹の駕籠は四つ（午後十時）頃に、向柳原の杉浦

家の門前におろされた。垂簾たれをあげて這い出したお絹は、よろけながら下駄を突っかけて立った。提灯の灯ほかげにぼんやりと照らされた彼女の顔はまだ蒼かった。暗い夜で、雨気あまけを含んだ低い雲の間に、うすい天あまの河がわが微かに流れていた。

駕籠屋にはなんにも言わないで、お絹はよろよろと潜り門の前へあるいて行った。門にはもう錠がおろされていて、闇に白い彼女の拳こぶしが幾たびかその扉に触れると、そばの出窓から門番のおやじが首を出した。

「どなた……」

門番は大きく呼んだ。

「あたしですよ」と、お絹は答えた。「仁科林之助さんに逢わし

てください」

「門限をご存じないか」

「それでも急用なんですよ。早く明けてください。後生ごしょうですか  
ら」

その媚なまめいた口ぶりに門番も不審を打つたらしい。やがて行燈を  
持ち出して来て、窓のあいだから表の人の立ち姿を子細らしく照  
らして見た。

「急用でも夜はいけない。あしたまた出直して来さつしやい」

「焦じれたい人だね。用があるというのに……」

「おまえは一体だれだ。どこの者だ」と、門番は声をとがらせた。

「林之助の女房ですよ」

「林之助の女房……」

「だから、早く逢わしてください」

「では、待たつしやい」

門番は不承ぶしように奥へはいった。お絹は古い門柱へ倒れるように倚よりかかつて、熱い息をふいていると、真つ暗な屋敷の奥では火の廻りの柝きの音がきざむように遠く響いて、どこかの草の中からがちやがちや虫の声もきこえた。

やがて潜り門の錠をあける音がからめいて、暗い中から林之助の白い姿が浮き出した。林之助は白地の寝衣ねまぎを着ていた。

「林さん」

声をかけて寄ろうとするお絹を、男は押し戻すようにして門の

外へ出た。ふたりは長屋の窓下を流れている小さい溝どぶのふちに立った。溝の石垣のなかに、こおろぎがさびしく鳴いていた。

「おい、どうしたんだ。今時分こんなところへやって来て……」  
と、林之助は小声で叱るように言った。

「お前さんに逢いたくって……」

「馬鹿」と、林之助はまた叱った。

武家奉公の林之助が両国の蛇つかいに馴染みがあるなどということとは、もちろん秘密にしなければならぬ。どんなことがあっても屋敷へ訪ねて来てはならないと、かねて固く言い含めてあるのに、夜中だしぬけに御門を叩いて自分をよび出しに来るとは、あんまり遠慮がなさ過ぎると、林之助は呆れて腹が立った。

「どうで馬鹿ですから堪忍してください。あたし、今夜はどうしてもお前さんに逢いたくつて、逢いたくつて……」

その酒臭い息と、もつれた舌とで、女がひどく酔っているのを林之助は早くも覺つた。なまじいここでぐずぐず言っているよりも、だまして早く追い返した方が無事らしいと気がついて、彼はそこに待っている駕籠屋を呼んだ。

「おい、おい。この女はだいぶ酔っているようだ。気をつけて送ってくれ。お絹、いずれあした逢つて詳しい話を聞くから、今夜はおとなしく帰ってくれ」

「あい」

「それとも何か急に用でも出来たのか」

返事に困ってお絹はぼんやりと黙っていた。

ふとした浮気からお花に誘い出されたが、さて行つて見ると面白くないことだらけで、胸のむしゃくしゃに堪えないお絹は、その反動で林之助が遮しゃにむに二無二恋しくなつた。飛び立つほどに逢いなくなつた。殊に酒にはしたたかに酔つていたので、彼女は前後の考えもなしに自分の駕籠をこの屋敷まで送らせたのであつたが、来てみると別に用はない。彼女は林之助の顔を見ると、張りつめた気が急にゆるんで、狐の落ちた人のようにぼんやりしてしまつた。

それでも直ぐにおとなしく帰ろうとはしなかつた。

「おまえさん、今夜出られないの」

「どこへ行くんだ」

「あたしの家へ……」

もう一度「馬鹿」と言いたいのを林之助は喉へのみ込んで、今夜これから出るわけにはいかない。あしたはこっちからきつと訪ねて行くから待っている、<sup>すか</sup>賺すように言い聞かせて、無理に女の手をとって駕籠に乗せようとする、お絹は男の腕へぶら下がるようにして処女きむすめのようなあどけない甘えた声で言った。

「林さん。あたし、これからは何でもお前さんのいうことを素直に聞きますからね。不二屋へ行っちゃあいやよ。え、よくって」

「承知、承知」

銀あまのがわ河はいつか消えて、うす白い空の光りはどこにも見えな

かつた。お絹を乗せてゆく駕籠の端を、影の瘦せた稲妻が弱く照らした。袖をかきあわせて立っている林之助の寝衣の襟に、秋の夜露が冷びやと沁みて来た。

「遅く門をあけさせて、気の毒だったな」

門番に挨拶して林之助は自分の部屋へ帰った。

寝入りばなを起された彼は、目が冴えて再び眠られなかつた。

お絹は今夜なにしに来たのであろう。おそらく酒に酔つた勢いで唯なにが無しにここへ押し掛けて来たものと解釈するよりほかはなかつた。この頃だんだんに狂女染みて来るお絹の乱れ心を林之助は悲しく浅ましく思った。これがいよいよ嵩じて来たら何を仕いだすかも判らない。真つ昼間、ここの玄関へ乗り込んで来るか

も知れない。その暁あかつきには自分の身はなんとなる。林之助は去年のわびしい浪人生活を思い出さずにはいられなかった。お絹のものすごい眼に絶えず見つめられている怖ろしさと苦しさを恐れずにはいられなかった。

お絹は自分を本所ほんじょの家うちへ再び引き戻そうと念じている。冗談ではあろうが、屋敷をしくじるように祈つていと言ったこともある。あるいは今夜を手始めに、これからたびたびここへ押し掛けて来て、所詮しよせんこの屋敷にはいたたまれないように仕掛けるのではあるまいかと、林之助はまた疑った。時節を待てとあれほど言つて聞かせてあるのに、まだ判らないのかと林之助は腹立たしくもなった。彼は又もやお絹とお里とをくらべて考えた。お絹と深

く馴染む前に、なぜ早くお里を見付け出さなかったのでしょうか。今更のように悔まれた。そうして、ふた口目には不二屋のことを言つて、執念ぶかく絡からみかかるとお絹の妬ねたみがうるさくなくなった。おれはどうしても蛇の眼から逃がれることが出来ないのでしょうか。これも因果と諦めてしまわなければならないのであろうか。おれは忌いやらしい蛇いの縛ましめを解いて、ほんとうの女と人間らしい恋をすることは出来ないであらうか。

「執り殺すなら、殺してみろ」

こういう口の下から、彼は言い知れぬ恐怖とらに囚とらわれて、とてもお絹の呪いに堪えられないような不安をも感じた。これまでの義理も捨てられなかった。うるさいとは思いながらも、その情けの

こまかい味わいを忘れることはできなかつた。考え疲れた彼のあかつきの夢は、胸へ這いあがつて来る青い蛇にうなされた。

あくる朝はなんだか気分が快よくなかつた。ゆうべよく眠れなかつたのと、寝衣ねまきで夜露に打たれたのとで、からだだるが鈍だるいようにも思われた。お絹をたずねる約束をはつきり記憶していながらも、林之助は早朝から屋敷を出てゆく元気もなかつた。そのうちに主人の使いで牛込まで行かなければならないことになつたので、彼はとうとう両国橋を渡る機会を失つてしまつた。

「留守にまた押し掛けて来やあしまいか」

あやぶみながら帰つて来たが、お絹はきようは姿を見せなかつたらしい。誰もたずねて来なかつたという門番の話聴いて林之

助はまずほつとした。その日は一日陰っていて、夕方から霧のよ  
うな雨がしとしとと降って来た。急にあわせ袷が欲しいほどに涼しくな  
って、せんき疝気もちの用人はもうおんじやく温石を買いにやったなどとい  
つて、蔭で若侍たちに笑われていた。

雨はその晩から明くる日まで降り通した。きょうの花火はお流  
れであろうと、林之助は雨の音をわびしく聞いた。そうして、雨  
の降る日にでも遊びに来てくれと、このあいだの晩お里にささや  
かれたことを思い出した。しかし彼はどうしてもお絹の方へ行か  
なければならぬと思ひ直した。きょうもひる午さがりでなければ出  
られなかつたので、八つ（午後二時）少し前に屋敷を出て、冷た  
い雨のなかを両国へ急いだ。

打ちどめの花火を雨に流された両国の界限は、みじめなほどに寂なられていて、列ならび茶屋も大抵は床しょうぎ几ぎを積みあげてあつた。野の天あきんど商人もみな休みで、ここの名物になつてゐる鰯いわしの天麩羅てんぷらや鯿にしんの蒲焼かまぼこの匂においもかぐことはできなかつた。秋の深くなるのを早く悲しむ川岸の柳は、毛のぬけた女のように薄い髪を振りみだして雨に泣ないでいた。荷足にたりぶね船の影さえ見えない大川の水はうす暗く流ながれていた。

林之助も暗い心持ちで長い橋を渡つた。

今頃自宅へ行つても居ないことを知っているので、林之助はお絹を東両国の小屋にたずねると、お絹もお君も見えなかった。お絹はきのうの朝から気分が悪いのを、無理に押しして楽屋へはいつたが、どうしても途中で我慢ができなくなった。このあいだのように舞台上で倒れるようなことがあつては大変だとみんなも心配して、中入り前に家へ送つて帰したが、それから続いて気分もすぐれないで、きょうもとうとう休むことになった。折角の書入れ日に雨は降る、姐さんには休まれる、いやいや散々さんざんですと、楽屋番の豊吉がこぼし抜いていた。

「まあ、一服おあがんなさいまし」

豊吉に煙草盆を出され、林之助も直ぐには起たれなかった。殊

に樂屋じゆうの者ともみんな顔を識り合っているので、彼はしめつぽい座蒲団の上に片膝をおろして、煙草をすいながらふたこと一言三言つまらないことを話していた。豊吉を除いて、ほかの女たちはさすがにそれぞれ小綺麗なひとえもの単衣を着ていたが、それでもめつきり涼しくなつたと寂しそうに言うかれらの顔の上には、だんだんに冬に近づくの悲しむような薄暗い色が浮かんでいた。昼でも樂屋の隅には瘦せた蚊が唸っていた。

「ごめんなさい」と、お花は林之助に会えしやく釈して舞台へ出て行つた。出るときに豊吉を見返つて、火鉢のおおやかん大薬罐をあご頤でさした。「あたしの引つ込んで来るまでに、よく沸かして置いて頂戴よ。からだを拭くんだから」

「あい、あい」

「姐さんがいないと思つて乙<sup>おつ</sup>う幅を利かすね」と、お若はお花のうしろ姿を見送つて言つた。

「へん、馬鹿にしていやあがる」と、豊吉は罵るように言つた。

「からだか拭きたけりや大川へでもほんぽん飛び込むがいいや」

「でも、きようは姐さんの代りを勤めているんだから、仕方がないさ」と、お若は妬ましそうに言つた。

「姐さんはよつぽど悪いのかね」

林之助に訊かれて、お若はすぐにうなずいた。

「そりやまつたく悪いらしいんですよ。なんでもおとといの晩は大変にお酒を飲んで、夜風に吹かれてそこらを夜なかまでうろう

ろしていたんで、風邪を引いたらしいですよ」

「おとといの晩……」と、林之助はすこし考えた。「一体どこでそんなに飲んだんだろう」

ふだんからお花とは余り仲のよくないらしいお若は、この問いに対して無遠慮にべらべらしゃべった。なんでもおとといの晩、姐さんはお花に誘い出されて向島のある料理茶屋へ行つた。そこで無暗に飲んで来たらしいと言つた。

「お花が奢おごつたのかしら」

「どうですかねえ」と、お若は意味ありげに笑つていた。

お花がそんな所へ連れ出して奢る筈がない。客に連れられて行つたに相違ないということは、林之助にもすぐに判つた。

「花ちゃんは悪い人よ」

こう言ったお若は、豊吉と眼を見あわせて急に口をつぐんだ。

林之助は面白くなかった。これには何か深い意味が忍んでいるらしく思われた。しかしこの上に根問ねどいしても、どうで正直のことは白状しまいと思つたので、彼はいい加減に話を切りあげて起つた。

外へ出ると雨はまだびしよびしよと降つていた。林之助は傘をかっいで往来にぼんやり突つ立つていた。病氣と聞いたらばなおさら急いでお絹を見舞うべきであるのに、彼はなんだか足が向かなかつた。今の話の様子では、お花の取持ちで或る客と向島へ行つたらしい。しかもそれが普通の客ではないらしく思われてなら

なかった。自分のところへ押し掛けて来たのはその帰り途に相違ない。当てつけらしく自分をからかいに来たのか、それとも後悔してあやまりに来たのか。いずれにしても、林之助はいい心持ちでその話を聞くことは出来なかった。

「しかし折角ここまで来たもんだ。行ってみよう」

林之助はまっすぐに本所へ行つた。傘をかたむけて狭い路地へはいると、路地のかどの店にはもう焼芋のけむりが流れていた。お絹の家は昼でも表の戸が閉めてあつたが、叩くとお君がすぐに出て来た。

「おそろしく用心がいいね」

「ここらは下駄を取られますから。格子に錠じょうがないんですもの」

と、お君は言い訳をしながら濡れた傘を受取った。

奥に寝ていたお絹はすぐに起き直つたらしい。林之助が足駄あしだをぬぐのを待ちかねたように声をかけた。

「お前さん。きのうなぜ来てくれなかつたの」

「きのうは御用で牛込へ行つた」

枕もとに坐つた林之助の顔を、お絹は黙つてじつと眺めているので、彼は堪えられなくなつて眼をそむけた。

「下手な捕とつたり人のように、ふた口目には御用……。屋敷者はほんとうに都合がいいね」

「屋敷者も楽じゃあねえ」

「楽じゃあねえ屋敷者を好んでする人もあるのさ。誰も頼みもし

ないのに……」と、お絹は口で笑いながら睨んだ。

「一体どこが悪いんだ。飲み過ぎたんだというじゃあねえか」

「両国の方へ寄つたの。お花に逢つて……」

「むむ。みんなに逢つた」

お絹はしばらく黙つて俯向いて、油の匂う枕をうつとりと見つめていた。もう枯れかかった朝顔の鉢を一つ列べてある低い窓の外には、雨の音がむせぶように聞えた。

「林さん」と、お絹はだしぬけに言った。「あたし、お前さんにあやまることがあるの。実はおとといの晩、お花にうつかり誘い出されて、向島の料理茶屋へ行つたと思つてください。石を抱くまでもない、あたしは何もかも正直に白状しますよ。そのお客と

いうのは何日も来る浅草の質屋の息子で、あたしもちつとは面白いかと思つて行つてみると、まるで大違い。あんまり癪にさわつたから、自棄やけになつて無暗に飲んで、喧嘩けんかづらでそこをふいと出てしまつて、それからお前さんの屋敷へ押し掛けて行つたの。ね、判つたでしょう。お花がなにを言つたか知らないが、ほんとうの話はそれだけですからね。必ず悪くとつちやあ困りますよ。それにしても、あたしが悪いんだから謝まります。堪忍してください」

「それだけのことなら何もあやまる筋でもあるめえ。おらあもつと悪いことをしたのかと思つた」と、林之助は少し皮肉らしく笑つた。

「なんつても言うがいいのさ」と、お絹も寂しく笑つていた。

お君が羊羹ようかんを切つて菓子皿に盛つて来た。それはけさ両国の小屋主ぬしから見舞いによこしたのだと言つた。羊羹をつまみながら林之助は枕もとの古い屏風をながめた。林之助がまだここにいる頃に粗相で一カ所破いたので、なにか切貼きりばりをするものはないかと、彼は近所の絵草紙屋へ行つて探した末に、鬼の念仏の一枚絵を買つて来て貼り付けた。夜泣きの呪まじないじやあるまいしと、お絹は思わず嘖すずき出したことがあつた。

その一枚の絵は煤すすびたまままで今も屏風に貼り付けてある。林之助に取つてはこれも懐かしい思い出の一つであつた。

彼はここへ身を寄せてからの小一年のあいだの出来事を、それからそれへと思いうかべた。そうして、自分の眼の前に悩ましげ

に坐っているお絹の衰えた姿を悼<sup>いた</sup>ましく眺めた。その妖艶のおもかげはきのうに変わらないが、僅か見ないうちに小鼻の肉が落ちて、頬が痩せて、水のような色をしている顔の寂しさが眼に立った。それと同時に、まぶたのやや窪<sup>くぼ</sup>んだ例の眼がいよいよ物凄く見えるのも林之助をおびやかした。

「お前さん。まだあたしを疑っているの」と、お絹は蒲団に片手を突きながら訊いた。

「なに、なんとも思うものか」

差しあたつては林之助はこう言うよりほかはなかつた。彼はこの上に向島の一件を詮議するわけにもいかなかつた。お絹もきょうはお里のことはひと言もいわなかつた。ふたりは秋の雨を聞き

ながら静かに世間話などをしていた。二人がこれほどむつまじく打解<sup>うちと</sup>けて話し合っているのは近頃に珍らしいことで、次の間で聞いているお君もなんとなく嬉しかった。

しかし、こうして打解けているのは表向きで、二人の魂はかえってしだいに遠ざかっていくのではないか、というような寂しい思いが林之助の胸に湧いた。口では何とも思っていないと言うものの、向島の一件はまだ自分の胸の奥にわだかまっている。お絹もお里のことを忘れたのではあるまい。たがいの胸に思うことを抱<sup>だ</sup>いていながら、それを押し隠して美しく付き合っている、それがすでに他人行儀ではあるまいか。たがいの思うことを遠慮なく言い合って、泣いたり笑ったりした昔の方が林之助はいっそ懐か

しいように偲ばれた。打解けていながらだんだん離れてゆくような寂しい心持ち、それを林之助は我ながらどうすることも出来なかった。どうしてこんな心持ちになったのか、それも自分には判らなかつた。

お絹の胸にも不安のかたまりが鉛なまりのように重く沈んでいる。おとといの晩の気まぐれは自分でも深く後悔している。自分の男は林之助のほかにはないという事がつくづく思い沁みた。殊にきのうの煩らいから、彼女は急に気が弱くなった。

医者にも大事にしろと言われたが、けさから身体に悪寒さむけがして、胸のあたりが痛んでならなかつた。咳をするたびに、あばらへ強くひびいて切せつなかつた。彼女はからだの悩みの重なるに連れて、

いよいよ林之助が恋しくなった。

それにつけても、向島の一件を林之助が案外手軽く聞き流しているのが不安であつた。お花やお若のおしやべりが何を言つたか知れたものではない。それを林之助はどう聞いたか、なんと思つているのか、なまじ、何も言わずに打解けた様子を見せているだけに、心の奥底が知れなかつた。

お絹も林之助もこうした別々の心をもちながら、日の暮れる頃まで仲よく話した。あまり長く起きていては悪かろうと、お絹を寝かして林之助はそつと歸つた。

「姐さんに氣をつけておくれよ」と、林之助はお君に頼んで路地を出た。

暗い雨の音が、傘をたたいて、本所七不思議の狸でも化けて出  
そうな夕暮れであつた。薄ら寂しくなつた林之助は、これから屋  
敷へ歸つて余りうまくもない惣菜そうざいを食うよりも、途中でなにか  
あつたかいものでも食つて行こうかと思つた。お絹が起きていれ  
ば無論いっしょに食うつもりであつたが、病人の枕もとに坐つて  
自分ひとりで食う気にもなれないので、彼はそのまま出て来たの  
であつた。お絹の家しやもやにいる時にたびたび食たに行つたことがある  
ので、林之助は近所の軍鶏屋へはいつた。  
彼は一人でちびりちびりと酒を飲んだ。

その晩の四つ（十時）過ぎに、林之助は屋敷へ帰った。

「どうも遅くなつて済まないね」

門番のおやじに挨拶して、彼は自分の部屋にはいった。うすら寒い雨の夜をあるいて来て、内へはいると急に酒の酔いが発したらしく、彼はかつかとほてる頬をおさえて自分の小さい机の上にしばらく俯伏していた。それからしずかに起ちあがつて、戸棚から蒲団と衾をひき出した。彼は蒲団の上に坐り直して今夜のことを考えた。

彼は両国の軍鶏屋で一人さびしく飲んでいた。しだいに酔いが

まわつて来るに連れて、彼はお里のことをふと思い出した。雨の降る日にでも遊びに来てくれとささやかれた甘い言葉を、又しても思い出した。きようの雨で花火はお流れになつて、列び茶屋も大抵休んでいることを彼はさつき見て知つていたので、お里は家うちにいるに相違ないと思つた。

「これから行つて見ようかしら」

林之助はふらふらとそんな気にもなつた。お絹の影が彼の頭から消されたのではなかつたが、酔つてゐる彼は、なに、かまうものかと大胆に構えた。単にお里の家へ寄つて来るだけのことならば、別に子細もない筈だと彼は自分で理屈をこしらえてしまった。勘定をすませて表へ出ると、秋の日はもう暮れ切つて、雨戸を半

分ひき寄せてある町屋まちやの灯の影が暗い往来を淡く照らしていた。雨は相変らず、むせぶようにびしよびしよと降っていた。彼は傘をかたむけて外神田まで濡れて行つた。

このあいだの晩お里に教えられた通りに、横町の酒屋の狭い裏へはいると、右側に小さい二階家があつて、格子と台所とが列んでいた。林之助はそつと格子をあけると、内では鈴の付いた鍔はさみを置く音がきこえて、入口の障子がさらりとあいた。うす暗い行燈の灯の影をうしろにしているので、出て来た人の顔はこつちによく見えなかつたが、「あら」と可愛らしい女の声が彼女であることを林之助はすぐ覺つた。お里はいそいそとして、この若い侍を内へ招じ入れた。二階家といつても、俗にいう行燈建あんどんだてで、上下

ともにひと間ずつしかないらしく、階下の六畳には古いながらもよく拭き込んだ長火鉢を据えて、茶箆筥が行儀よく列んでいた。小さい神棚には燈明の灯が微かにゆらめいていた。

「こんな穢きたないところで……」と、お里は恥かしそうに言い訳をしながら、綴とじくつっていた小切れを片付けて薄い座蒲団を出した。林之助は長火鉢の前に坐らせられた。お里は茶をいれて、振出しの箱のなかから金平糖こんぺいとうなどを出した。

「それでもよくいらして下さいましたね」

お里は嬉しそうに言った。おふくろは近所に百ひやくまんべん万遍まんべんがあつて、あかりが点くとすぐに出て行ったから、四つ過ぎでなければ帰るまいとのことであった。

相手が迷惑そうな顔を見せないの、林之助も腰を落ち着けて、先方の茶や菓子を買って唯べらべらとしやべっているほどの野暮でもないの、林之助は鮓やすけでも取ろうと言った。ついでに酒を買って貰いたいと言って、幾らかの銀かねを出した。

「降るのに気の毒だね」

「なに、隣りの子に頼みますから」

隣りの女の子に使いをたのんで、お里は鉄瓶の下に炭をついだ。小降りにはなつたらしいが、雨はまだしよぼしよぼと降っていた。百万遍の鉦らしいのが雨の中にきれぎれに聞えた。

「秋の雨はなんだか陰気で寂しゆうございます」と、お里は錦絵

の花魁を貼ったうしろの壁を見かえりながら言った。

自分はいつたい陰気な質であるが、たちこういう日にはなんだか引き入れられるように気が滅入めいって、自然に悲しくなるなどと話した。きょうの花火がお流れになって、お前ばかりでない、みんなも陰気な顔をしているだろうなどと、林之助も言った。話はだんだんに暗い方へ糸を引かれて行って、このあいだの晩の続き話のように、お里は自分の頼りない身の上を語り出した。親ひとり子ひとりではかには力になってくれる身寄りもないと、彼女は訴えるように言った。殊に母は病身であるから、いつどんな悲しいことが落ちかかって来るかも知れないなどと、心細いように言った。話はいよいよ沈んで行った。

うす暗い心持ちでお絹の家を出た林之助は、ここで又こんな滅  
入った話を聞かされるのは辛かった。彼は陽気に冗談の一つも言  
つて見たかった。店にいる時もおとなしいという評判の娘ではあ  
るが、自分と二人ぎりの場合はいよいよおとなしい、むしろ陰気  
なくらいに沈んでいるのが、林之助にはなんだか物足らなかつた。  
しかし、いかにおとなしいと言つても、もともとが水茶屋みずぢややの女  
である以上、ひと通りのお世辞や冗談ぐらいが言えないのではな  
い。それが自分に対してはいつもまじめ過ぎるほど堅気らしく附  
き合っているのは、さすがに通り一遍の客とも思っていないので  
あろうかというような、一種のうぬぼれも林之助をそそのかした。  
又そればかりでなく、心の弱い彼としては、こうした涙の多い話

はうわの空で聞き流していることは出来なかつた。彼は次第にその話の底の方まで引き入れられて、おのずと涙を誘い出された。

そのうちに鮓が来た。お里はすぐに爛の支度をした。自分たちは

つとも飲めないと言つたが、それでも無理に二、三度は猪口ちよこを受

取つた。林之助も飲んだ。酒の酔いが若い二人を誘つて、だんだ

んに明るい華はなやかな方へ連れ出した。林之助も軽い冗談をいつた。

お里も袂を口に掩いながら笑つた。彼女はもう酔つたといつて、

夢見る人のようにうっとりとしていたが、雨の音がざつとまた強

くなつたので、お里は縁側へ出て、まばらに閉めてあつた雨戸を

ばたばたと閉め切つてしまった。林之助も起つて手伝つてやつた。

「どうも済みません」

「なあに、ここの家へお婿うちに来たんだから」と、林之助はお里の肩を軽くゆすつて笑った。

どこかで雨漏りあまもがするらしく、天井の裏でときどきにしずくの落ちる音がほとほと聞えるのも寂しかった。紙のすすけた行燈の灯は陰ったようにぼんやりと暗かった。二人はしばらく黙って火鉢の前にむき合っていた。

四つ少し前に林之助は帰ったが、阿母おふくろはそれまで帰って来なかった。今夜も林之助は幾らか包んで置いて帰った。

林之助は蒲団の上で、これだけのことをそれからそれへと繰り返して考えた。お里と自分とは、もう切り放すことのできない鞆き

絆ずなが結び付けられたことを観念すると同時に、彼は言い知れぬ悔みと悩みとにひしひしと責めつけられた。こういう場合に大抵の人が試みるように、彼もそれを酒の科とがにかずけて、自分の重荷を軽くしようと努めた。しかしそんな卑怯なことで、自分の胸が安まろうとはさすがに思われなかつた。

「おれは意気地がないな」と、彼は枕をつかんで自分をあざけつた。

自分のふるい友達のなかには三人五人の堅気の女をだまして振り捨てた者もあつた。吉原の女郎を欺して住み替えさせて、その金で芸者と駈落ちをした者もあつた。しかし、自分はゆく先きぎきで恋をあさつて歩くような人間ではなかつた。あとにもさきき

もたつた一度お絹と恋に落ちて、その罘わなから抜け出すことができないで、今ももがいているではないか。それがまた別の新しい罘にかかつて、更に首を絞められてどうするのか。彼はつくづく今夜のおのれを悔まずにはいられなかつた。そうして、あまりに正直に生まれ過ぎたおのれを齒がゆく思わずにはいられなかつた。宵に軍鶏屋しやもやを出たときの勇氣と大胆とは、今の林之助の頭からは吹き消したように消え失せていた。

「こうなればお絹を捨てるか、お里にそむくか」

二つに一つに決めてしまわなければ、彼は一日も安心していられないように思われた。両手に桃桜などという洒落れた詞ことばは、林之助にはいつさい不通用であつた。彼は桃か桜か、そのひと枝を

大事に守っていないなければ気が済まなかった。ものすごい蛇の眼を恐れていながらも、まったくお絹を見捨て得なかったのも、こうした正直な心のわずらいであった。世間普通の人の眼から見たらば、多寡が蛇つかいの女と水茶屋の女と、そんな女の二人や三人がなんだと言うかも知れない。それができないのを林之助はくやししく思った。腑甲斐ふがいなく思った。意気地なしだとも思った。彼はそこに自分の美しい魂を見いだし得ないで、かえって自分の馬鹿正直さが情けないようにも思われてならなかった。

それでも彼はやはりその美しい魂に支配されていた。どちらかの女に対して自分の罪を詫びて、あきらかに一人を捨てて一人を取ろうと決心した。しかも、これまでの行きがかりから言うと、

彼はどうしてもお絹を裏切ることではできなかつた。お絹の呪いも怖ろしかつた。

「なぜ今夜お里を訪ねたろう」

どう思い直しても、彼は今夜のおのれを悔まずにはいられなかつた。彼の涙は枕の上にはらはらとこぼれた。

彼はまぼろしのように眼の前にあらわれて来たお里のおとなしやかな顔にむかつて、手をあわせて幾たびか詫びた。

彼を安らかに眠らすまいとするように、雨は大きい屋根の瓦を夜通し流れて、軒の大おおどい樋に溢れるような音を立てていた。

それから三日ばかりは御用繁多はんだで、林之助は屋敷を出られなかつた。九月にはいつて晴れた空がつづいた。きようは夕方から深川ほつくに発句うんざの運座があるので、まずお絹の病気を見舞つて、それから深川へまわろうと、彼は午ひるさがりに屋敷をぬけ出した。

往来の人はみな裕あわせを着ていた。林之助も新しい裕を着た。澄み切つた青い空に秋の風が高く吹いて、屋敷町には赤とんぼの群れが目まぐるしいほどに飛び違つていた。鷹たかじょう匠じょうが鷹たかじょうを据えて通るのも、やがて冬の近づくのを思わせた。町へ出ると、草鞋わらじを吊るした木戸番小屋で鰯を買っているのが見えた。

柳橋の袂で林之助は友達に逢つた。彼はやはり浅草の或る旗本

屋敷の中小姓を勤めている男で、これも今夜の発句の会へ出る一人であつた。彼は梶田弥太郎といつて、林之助よりも三つばかりとしかさ年長であつた。

「やあ。どこへ」と、二人は立ち停まつた。今夜の発句の話なども出た。弥太郎はこれから両国へ遊びに行こうと言つた。ゆくさきは列び茶屋に決まつているので、林之助はすこし躊躇した。お里に逢うのはなんだか気が咎めるようであつた。

「え、お里の顔でも見に行こうじゃないか」と、弥太郎は言つた。「それとも、御用かい」

着流しの林之助は御用に行くとも言われなかつた。彼は断わり切れないで一緒に引き摺られてゆくと、不二屋の軒提灯は秋風に

ゆらめいていた。二人はずつと店へはいつて床几に腰をかけると、これも顔なじみのお染という若い女が愛想よく茶を汲んで来たが、茶釜の前にもお里のすがたは見えないので、林之助は一種の失望を感じた。

「きようはどうしたい、お里は……」と、弥太郎も<sup>あて</sup>的がはずれたような顔をして訊いた。

「里<sup>さあ</sup>ちゃんはまだ少しさつきまでいたんですけれど、おつかさんが急病だといって、家<sup>うち</sup>から迎えが来たもんですから、びっくりして帰ったんですよ」

「おふくろが急病……」と、林之助も驚いた。「さつきまでここにいたくらいじゃあ、ほんとうの急病なんだね」

「ええ。けさまで何ともなかつたんだそうですがね。どうしたんでしよう。迎いの人の口ぶりじやあもういけないらしいんですよ」と、お染も顔をしかめて言った。「その話を聞くと、可哀そうに里ちゃんはわあつと泣き出して……。あの子undanから親孝行なんですからね。いよいよいけないとなったら、さぞがっかりするでしょう」

「そりやあ気の毒だね」

弥太郎もさすがに顔の色を陰らせた。林之助は茶碗を持っている手さきがふるえた。病身とはかねて聞いていたが、現に先月末の花火の晩には近所の百万遍の数珠じゆずを繰りに行ったお里の母が、きよう俄かに死にそうな大病に取りつかれるとは、あんまり果敢はか

ないように思われた。その母の枕もとに親孝行のお里が取り乱して泣いている、いじらしい姿もすぐに彼の眼にうかんだ。

「虫が知らすでも言うんですかしら。里ちゃんはこの二、三日なんだかぼんやりしていて、唯うつとりとうしろの川の水を眺めていたりして、人が声をかけても返事をしないこともあるんですよ。今思うと、やはりこんなことがある前兆しらせだったのかも知れませんが」と、お染はまた言った。

お里がこの二、三日物思わしげに暮らしたのは、母に別れる前兆であつたらうか。なんにも知らないお染がいちぢず一途にそう解釈するのは無理もなかった。しかし林之助は、もつと深い意味でこれを考えさせられた。あの以来、ぼんやりするほど思いつめているお

里を、自分はどう処分しようと考えているのか。彼は我ながらぞつとするほどに自分の酷むごたらしい心を恐れた。

「里ちゃんの家は都合がいいのかね」と、彼は知れ切ったようなことを訊いてみた。

お染も知れ切った事をいうような顔をして、すぐ打ち消すように答えた。

「どうでこういうところへ来ていくくらいですもの、都合のいいことがあるもんですか。ほかに頼りになるほどの親類もないそうですから。阿母おつかさんの病気が長引くようなら勿論のこと、今すぐに死なれても第一にお葬とむらい式にも困るくらいでしょうと思うんですよ。ここのおかみさんも幾らか面倒をみてくれるでしょうし、

あたし達もまあ、ちつとでも何とかしてやりたいと思つてゐるんです」

聞けば聞くほど林之助の胸は痛くなつた。彼は飲んだ茶を吐き出したくなつた。

弥太郎もよほど気の毒になつたのと、一つはお染に対する見<sup>みえ</sup>でもまじつてゐるらしく、幾らかの銀<sup>かね</sup>を紙に包んで、お前の行くついでにこれをお里にやつてくれと出した。林之助も見えていられなくなつて、彼も紙に包んだものをお染の手へ渡した。

しかし、この位のことでは済むまい。自分はなんとか特別の算段をしてやらなければなるまいと、彼は胸のなかでその銀<sup>かね</sup>の工面<sup>くめん</sup>を考えた。それにしても、ここに唯ぶらぶらしては どうにも

ならなかつた。

彼はいい加減の口実を作つて、弥太郎にわかれてひとまず不二屋を出た。

「どこへ行こう」

少なくとも一両の金がほしいと彼は思った。その工面が付かなければ二歩ぶでも三歩でもいいが、旗本屋敷の中小姓ではその取り分も知れている上に、暇さえあれば遊びあるいて無駄な小遣いひやく銭をつかい尽くしている今の彼は、食うにこそ不自由はないが、百文ひやくでも余分のたくわえなどのあろう筈はなかつた。しかもその小遣いの多くはお絹の貢みつぎもの物であつた。彼もこの場合には、お絹のところへ無心に行きたくなかつた。用人や給人にももう幾許いくらずつ

か借りているので、この上に頼むわけにはいかない。質屋を口説くにしたところで、金目になりそうなものを持っていない。さりとて大小を質に置くわけにもいかない。林之助もこれには行きづまった。それでも彼はどうしても幾らかの金が欲しかった。無理な工面くめんをしても直ぐに外神田へ飛んで行って、泣き腫らしているお里の眼の前へ、その金をずらりと投げ出してやりたかった。

「こういう時に人間は悪気わるぎを起すのだ。出来るものなら俺も定九郎でも極きめたい」

彼はこんな途方もないことまで考えた。そうして、自分でぎよつとしてあとさきを見まわした。彼の足は行くともなしに両国橋を渡りかけていた。橋番の小屋で放し鰻を買って、大川へ流して

やっている人があつた。林之助はその財布を引つたくつて逃げたかつた。

焦<sup>じ</sup>れてもあせつてももう仕様がな<sup>い</sup>。ひとの物に眼をかけるよりも、いつそお絹に借りた方が無事である。ほかに使う金と違つて、これをお絹から借り出すのは何分にも心苦しく思われてならなかつたが、今の林之助としてはこれが最もたやすい方法であつた。お絹も病気で寝ている。そこへ押し掛けて金の無心をいうのはあまり無<sup>むめん</sup>面目<sup>ぼく</sup>の仕方だとは思<sup>い</sup>ながらも、まさか泥坊もできない以上は、このくらしいのことは我慢するよりほかはないと、彼は思い切つて橋を渡つた。

「やあ、旦那」

楽屋番の豊吉に不意に声をかけられて、林之助はびっくりしたように立ち停まった。豊吉は楽屋の合い間を見て、お絹さんの家へちよつと見舞いに行つて来たと言つた。

「お絹さんはどうもよくありませんぜ。なんだかここがひどくせつ切せつないと言つてね」と、彼はあばらのあたりを叩いてみせた。

「困つたね」

「あなたもいずれお見舞いでしょうが、まあ、いたわつておあげなせえましょ。お絹さんも可哀そうですよ。そう言つちや何ですけれども、楽屋の者なんてみんな不人情ですからね。本氣になつて世話をしているのは、あのちつぽけなお君という子だけでさあね」

林之助はだまって突っ立っていた。観世物小屋のそうぞうしい鳴物の音も、彼の耳へは響かなかつた。豊吉はまたささやいた。

「それから、旦那。まあ当分、不二屋へはいり込むのをお止なせえましょ。お絹さんはそればかりを苦にしているんですから。ここであんまり心配させると猶なほなおからだの毒ですぜ」

「なに、この頃はちつとも行きやあしねえんだ。お辰やお花のおしやべりが詰まらねえことを言うんだろう」と、林之助はいい加減にごまかしていた。

「ほんとうですぜ。あたしが先きへ死ねば、きっと林さんを迎へに行くつて、お絹さんがそう言つていましたぜ」

豊吉は嚇おどすように言った。林之助はさびしく笑っていた。

「まあ、行つていらつしやい」

樂屋へはいつてゆく豊吉のうしろ影を見送つて、林之助の足はまた重くなつた。お絹に金を借りるのはどうしても義理が悪いように思われた。このまま引つ返そうかとも考えたが、お絹がそれほどどの容体ならば直ぐに見舞つてやらねばなるまい。ここまで来てから引つ返すという法はない。金の話は別として、ともかくも顔を見せて来なければ人情がないと思ひ直して、彼は又まっすぐに路を急いだ。

路地をはいつて格子をあけると、お君が出て来た。

「あら、豊さんが引つ返して来たのかと思つたら……。さあ、どうぞ」

お君は急ににこにこして林之助をお絹の枕許へ導いた。お絹は半分死んだようになってうとうとと眠っていた。その寝顔には、このあいだ見たよりも更にげっそりと痩せが見えて、こめかみの骨があらわになっていられるのも悼ましい病苦の姿をまざまざと描いているので、林之助は思わずほろりとなった。彼はお君にむかつて病人の容体をきくと、やはり豊吉の話の通りであった。お絹はときどきに熱が昇つて肋骨が痛む、それがひどく切なさそうだとのことであつた。

「君ちゃん」

林之助は小声で彼女を呼んで、次の間の長火鉢の前へ行つた。

「それで、お医者は何と言っているね」

「お医者さまはよっぽど大事にしなけりやいけないと言っているんです」と、お君は眼をうるませていた。

「そうかい」

林之助は指さきで眼がしらを撫でると、お君はもうしくしくと泣いていた。

「楽屋の者も看病に来てくれるかい。お花もお若も……」

みんな出掛けに一度ずつは見舞いに来てくれるが、親身しんみに看病してゆく者もないと、お君は頼りなげに言った。それでも豊吉はゆうべ来て、四つ少し前までいてくれたと話した。世間にはうわべばかりの親切が多いと、林之助はつくづく思った。しかし振り返ってみると、自分もその仲間ではないかとも危ぶまれた。彼は

自分で自分の不人情を責めた。

「わたしは主人持ちで、思うように看病にも来ていられないからね。気の毒だけれども、ねえ姐さんの世話はお前ひとりに頼むよ。もし急に模様でも変るようなことがあつたら、豊吉にたのんで私のところへ報せしらをよこしておくれ。豊吉はわたしの屋敷を知っているから」と、林之助はお君にささやいた。

お君は目を拭きながらうなずいた。そうして、姐さんを起しましょうかと訊いた。

「いや、折角よく寝ているものを無理に起さない方がいい」

二人は黙って火鉢の前に坐っていた。

そのうちにお君は薬鍋を持ち出して来て、火鉢の上で煎じはじ

めた。林之助は黙って煙草をのみながら、渋団扇で火を煽いでいるお君の小さい手さきを唯ぼんやりと眺めていた。やがて鍋の蓋がごとごとおどると、強い匂いを含んだ薬のけむりが靡くように林之助の袖に白く流れた。お里の家にもこんな匂いが漂ただよっているか、それとも線香のけむりが舞っているかと思うと、どっちを向いても涙を誘われることが多かった。

林之助はことしの秋のわびしさに堪えられなかった。

## 十二

薬が煎じつまつたので、お君はお絹を起しに行った。そつと揺

り起きされて、お絹は眼をとじたまままで訊いた。

「林さん。まだそこにいるの」

林之助はぎよつとして見返った。

「あたし、何だかうつつのように林さんが枕もとににいると思つたけれども、夢だつたかしら」と、お絹は言つた。

林さんはさつきから来ているとお君が言うと、お絹は初めて眼をあいた。林之助も起たつて枕もとへ行つた。

「やっぱり来ていたのね。どうもそうらしいと思つた」と、お絹はさびしくほほえんだ。「もうお前さん、来てくれやしまいと思つたのに……」

「冗談いっちゃいけない。いつも言うようだが、屋敷の方にも御

用が多いので、夜でも昼でも勝手に出るという訳には行かねえからね。このあいだ来た時からきよう初めて外へ出たんだ。誰にきいても判る。そりや嘘じゃあねえ。なにしろいつまでも悪くつちや困ったものだ。精出して養生しねえよ」

「お前さん、たいへんやさしくなったね」と、お絹はまた笑った。「どうでもう長いことはないんだから、少しはいたわつてくれるのもいいのさ」

「病いは気からというぜ。しつかりしてくれ」

林之助はお絹を抱き起すようにして薬を飲ませてやった。そうして、まだ若いからだだから、どんな病気でも養生次第で癒なおらないことはない。気を弱く持たないで、ゆつくりと療治をしてくれ

と、子供をすかすように言つて聞かせると、お絹も素直に聞いていた。

しかし今度の病氣ばかりは容易に癒りそうにも思われぬ。お前さんにほんとうの親切があるならば、屋敷から幾日かの暇を貰うか、それとも一生の暇を取るか、どっちにしても当分はからだをあけて、あたしの枕許へ来ていてくれ。その上でお前さんの看病がとどいて癒れば重ちようじよう 豊じよう、万一これぎりに死んでも思い残すことはない。あたしはどうかしてお前さんをもう一度自分の手許へ引き戻そうと念じているうちに、とうとうこんな病氣になつてしまつた。せめて死にぎわにはお前さんの手から一杯の水でも飲ませて貰いたいと、お絹はしみじみ言つた。

「林さん。いやかい」

まぶたは押しつぶしたように落ち窪んでいても、餌えさを狙うような蛇の眼が底の方に光っていた。今のやせ衰えたお絹の顔にはそれが一層ものすごく見えたので、林之助は今更のように身がすくんだ。彼はどうしても忌いやとは言われなくなった。あとはともあれ、この場では一応承知したと言わなければならぬように思われた。

「よし、よし、判った。しかし武家奉公というものは面倒なもので、親のかたきを探しに出るからといって、きょうが今日すぐに暇ひまをくれるわけのものじゃあねえ。長ながの暇いとまを貰うにしても今すぐという訳にはいかねえから、屋敷にいる間はなんとか都合して毎日見舞いに来る。さつきもお君に頼んで置いたんだが、急な用が

できたら直ぐに豊吉を迎いによこしてくれ。いつでも直ぐに飛ん  
で来るから。ね、それでいいだろう」

「欺<sup>だま</sup>すんじゃないね」と、念を押してお絹は納<sup>なつとく</sup>得した。

彼女はお君に、もう何どきだと訊いた。さつき八幡鐘の七つを  
聞いたとお君が言うのと、それでは林さんの好きな蒲焼でもあつら  
えろとお絹は寝ながら指図した。なに、そうはしてられないと  
林之助は言ったが、さすがに振り切つて起ちかねていると、お君  
はすぐ近所の鰻屋へ駈けて行つた。

「林さん、新しい衾<sup>めか</sup>なんぞ着て粧<sup>めか</sup>しているんだね」と、お絹は仰  
向いて男の姿をながめた。

「むむ、これか」と、林之助は衾の膝をなでた。「そら、いつか

話したことがあるだろう。この四月に新しく拵こぎえて、一度も手を通さねえで蔵くら入りにした奴さ。秋風が立つちやあ遣り切れねえから、御用人を口説いて二歩借りて、これと一緒に羽織や冬物を受けて来た」

「不二屋へ運ぶのが忙がしいから、身のまわりなんぞには手が届かねえのさ」と、お絹は笑った。「御用人さんに二歩借りて、それをどうして返すの」

「都合のいい時に返すのさ。まさか利も取るめえ」と、林之助も笑った。

「おまえさんにも都合のいい時があるのかしら。ちよいと、お前さん。この蒲団の左の下から紙入れを出して頂戴な」

言われた通りに林之助は紙入れを取って渡すと、お絹はそのなかから二歩を出した。

「暇を貰おうという矢先きに、借りなんぞあつちや拙ますいから、よくお礼をいって、御用人に早く返しておしまいなさいよ」

「だが、こつちも病気で物入りの多いところだろう」と、林之助は手を出しかねて、もじもじしていた。

「なに、こつちは又どうにかなるから」

二歩の銀かねを手に握って、林之助は気の毒でもあり、嬉しくもあつた。きようは幾らかの無心をいうつもりで来たのであつたが、このありさまではとても言い出せないと彼は諦めていると、その銀が偶然手に入つて、彼は拾い物をしたように嬉しかった。

屋敷の用人から二歩借りて、袷や冬物の質請けをしたのは嘘ではなかったが、それは今すぐに返さないでもいい。この二歩があれば、お里の家へも顔出しができる。こう思うと、彼は今直ぐにもここを飛び出したくなつた。今まではおちついて腰を据えていた彼も、銀をつかんで急に気が変つた。お里のことも急に気にかかつて、彼はなんだかさわそわして来た。しかしお君はまだ帰らない、あつらえ物もまだ来ない。殊に銀を貰つてすぐに逃げて帰るのも気が咎めるので、彼はおちつかない心持ちを無理に押し付けて、質しちに取られた人のおとなしく坐っていた。

やがてお君は帰つて来た。どうしてかきようは注文が立て込んでいたので、鰻の出前はすこし手間が取れると言つた。林之助は

それをいいしおに、自分は日が暮れるまでに屋敷へ帰らなければならぬから、手間が取れるならばいつそ断わつて来てくれと言つた。

「飛ぶ鳥はあとを濁すにごすなどということもある。屋敷にいるあいだは几帳面に勤めて置かなければいけねえ」

「それもそうかも知れない」

お絹も別に忌いやな顔をしなかつたので、お君は引つ返して鰻屋へ断わりに行つた。その帰るのを待ちかねて林之助も帰り支度をし

た。

「じゃあ、あしたまた来るぜ。君ちゃん、いいかい。頼むよ」

路地を出ると、日はもう暮れかかっていた。お君は路地の口ま

で送つて来て、姐さんの容ようだい体がどうもよくないから、あしたもきつと来てくれとすが縋るように言つた。その涙ぐんでいる顔が林之助にはいじらしく見えた。彼はきつと来ると約束して別れた。

橋の袂へ来ると、芝居小屋では打出しの太鼓がきこえた。早く閉まつた観世物小屋では、表の幟を取り卸しているのもあつた。

焼いたとうもろこしを横ぐわえにして、なにか大きな声で唄いながら通る中ちゆうげん間もあつた。まだすつかりは暮れ切らないのに、真つ白な白粉の顔を手拭にかくして石置場の方へ忍んでゆく若い女の群れもあつた。そのあとを追っかけて、中間たちが又なにか呶鳴つていた。

こうしたみだらな夕暮れの混雑に眼なれている林之助は、右も

左も見向きもしないで、急ぎ足に橋を渡った。川面かわもには薄い靄が流れて、列び茶屋にはもうちらちらと提灯の火が揺らめいて見えた。その華やかな灯のなかに、今夜はお里を見いだすことが出来ないのだと思うと、彼の足は神田の方へむかつてますます急がれた。

酒屋の路地へはいつて、格子の前に立つと、入口の障子は半ば開かれて、線香の匂いが狭い沓くつぬぎ脱にまで溢れていた。ここはもう薬の匂いではなかったので、林之助は急に暗い心持ちになった。案内を乞うと、女の児が出て来た。それはこの間の晩に使いを頼んだ隣りの娘らしかつた。

内へあがると、やはり近所の人らしいおかみさんや娘が四、五

人ごたごた坐つていて、逆さに立てまわした古い屏風のかげからは線香の煙りがうず巻いて流れていた。その屏風のそばに蒼い顔のお里がしよんぼりと坐つていたが、彼女は島田しまだをほどいて銀いちよ杏返うがえしに結い替えているので、林之助はちよつとその顔が判らないほどに寂しく見えた。

ひる前には隣りのおかみさんが話しに来た。その時までは阿おふく母も別に変つた様子もなかった。胸が少しせつないようだと言つていたが、やはりいつものように火鉢の前で檻ぼろ褌とじくりなどをしていた。ひる飯を食つてしまつて、台所へ茶碗小鉢を洗いにすると、彼女はだしぬけに倒れた。その物音に驚かされて駈けつけて来た時には、彼女はもう生きていない人ではなかった。それか

らすぐに両国へ使いをやつて、お里はころげるように駈けて歸つたが、とても間に合う筈はなかつた。そんな話をして、お里は声を立てて泣いた。

林之助はかの二歩を紙につつんで出した。もつとどうにかしたいのだが思うように行かないから、差しあたりはこれで堪忍してくれといった。お里は頂いて、それを隣りのおかみさんに渡した。おかみさんが葬式万端の世話を焼いているらしかつた。おかみさんは受取つてすぐに仏前に供えたが、二歩の重みは彼女かれの注意を惹いたらしく、今更のように林之助とお里の顔をじろじろと見くらべていた。こうした家へ大小をさした人が悔みに来るのは、すこし不似合いであると見えて、ほかの女たちもみな林之助に眼を

あつめて、今までべちやべちやしやべつていた者も一度に口を結んでしまった。

ここに長くいてはみんなの邪魔になると、林之助もさどつた。どうで周囲に大勢の人がいては、お里と打解うちとけて話をする機会もあるまい。かたがた今日は早く帰る方がいいと思つて、彼は早々に暇いとまご乞いをしてここを出た。

路地の出口で菓子売りのお此に逢つた。お此もこの近所に住んでいるので、これからお里の家へ悔みに行くのだと言つていた。「旦那さまもお里さんのところへいらしたんですか」と、お此は子細らしく訊いた。

隠すこともできないので、林之助も正直に答えると、お此は危

ぶむようにささやいた。

「あなた、お里さんのところへ行くのはお止しなさいましよ。飛んだことが出来ますよ」

このあいだ両国の楽屋で蛇責めに逢ったことを、お此は身ぶるいしながら話した。

「あの時のことを考えると今でもぞつとします。わたしはもうそれぎりあの楽屋へは商あきないにまいません。お絹さんは、もしこの後も相変らず不二屋にあなたの姿を見掛けるようなことがあると、この蛇を持ってお里のところへお礼に行くと、こう言うんです。それですもの、もしあなたがここの家うちへ来たなんていうことが知れたら、そりやあどんな騒さわぎが起るか知れませんか。第一お里さ

んが可哀そうですね。蛇なんぞ持つて来られた日にやあ、あの子は目をまわして死んでしまいましたよう」

林之助も息をつめて聞いていた。

十三

「困った奴だ」

林之助は口のうちに幾たびか罵った。

お此と別れて屋敷へ帰る途中で、彼はお絹を憎むの念が胸いっぱい溢れ切っていた。彼はお絹があまりに執念ぶかいので憎くなった。罪もないお里をそれほどに苦しめようとするお絹の妬み

深い心には、どう考えても同情することが出来なくなつた。一種の意地と、一種の江戸っ子かたぎとが彼をあおつて、彼は弱いお里をあくまでも庇つてやらなければならぬ、それが男の役目であるというようにも考えはじめた。

先月までの林之助はともあれ、今の彼はお絹に対してあまり立派な口をきけた義理でもないのであるが、彼はもうそんなことを考えている余裕がなかつた。お此を蛇責めにして、さらにお里を蛇責めにしようとするお絹の残酷な復讐手段に対して、彼の胸には強い反抗心が渦巻いて起つた。彼はいつそお絹を殺してしまいたいほどに腹が立つた。

また一方から考えても、自分はもうお里を振り捨てることの出

来ない破目になって来た。今朝まではなんとかして、お里に詫びて、いつそ綺麗に手を切ろうかとも考えていたのであるが、そのお里の母は死んで、彼女はかねて口癖のように果敢はかなんている悲しい頼りない身の上にいよいよ沈んでしまった。それを今さら無慈悲に突き放すことが出来るだろうか、お里が素直に承知するだろうか。おとなしい彼女は泣く泣く承知するかも知れないが、そんな弱い者いじめをして仁科林之助、江戸っ子でござると威張っていられるだろうか。林之助は眼にみえないきずながお絹の蛇の上に自分を絞め付けていることをつくづく覺つた。

そんなことを思い悩んで、林之助は今夜も眠られなかった。夜があけると、今朝も拭つたような秋晴れで、となり屋敷の大銀杏

の葉が朝日の前に金色こんじきにかがやいていた。高い空には無数の渡り鳥が群れて通った。その青空をみあげているうちに、林之助の頭はまた新しくなった。

ゆうべは一途いちずにお絹を憎んでいたが、罪はやはり自分にある。こうした関係をいつまでも繋いでいたら、お絹もお里も自分もますます深い苦しみの底へ沈んでゆくばかりである。気を弱く持つていては果てしがない。どうしてもここでお里に因果をふくめて赤の他人になるよりほかはない。無慈悲のようでもいつそ一日も早い方がいい、一寸いっすん逃がれに日を延ばしてゆくほどいよいよ二進にも三進さんもいかないことになる。

彼女はお里の母の初七日しよなのかでも済んだ頃にもう一度その家へた

ずねて行って、おだやかに別れ話をきめようと思った。自分はそれほど無慈悲な男でもないが、こうなったらどうも仕方がないと、林之助は悲しく諦めた。こうした諦めを付けるまでには、彼の眼からは男らしくもない涙が幾たびかにじんだ。

その日は御用があつて、林之助はどこへも出られなかつた。きようもきつと来てくれとお君に口説かれたことを思いながらも、彼はどうすることも出来なかつた。彼はお絹の怨みを恐れながらも、とうとう両国橋を渡る機会がなかつた。あくる日もまた忙がしかつた。彼は白金や渋谷の果てまで使いにやられた。この頃は意地の悪いように屋敷の用があるので、彼はすこし焦しれつたくなつて来た。なるほどお絹のいう通り、屋敷奉公をやめた方が気楽

かも知れないと思うこともあった。

しかし林之助は大小を捨てて町人になろうとは思わなかった。お絹の縁に引かれながらも、手ぶらでいつまでも彼女の厄介になつていたくもなかった。屋敷をやめれば忌でも応でもお絹のふところへ戻らなければならぬ。朝晩におそろしい蛇の眼と睨み合つていなければならぬ。林之助は第一にそれを恐れていた。やはり今のように遠く懸け離れていて、そうして時どきに逢つているのが一番無事であると信じていた。

九月八日の午ひるまえ前に、林之助はちよつとの隙きを見て両国へ行つた。あしたは重ちようよう陽ようの節句で主人も登城しなければならぬ。その前日の忙がしい中をくぐりぬけ、彼はもう堪まらなくなつて、

屋敷を飛び出したのであった。

両国の秋はいよいよ深くなつて、路傍みちばたには栗を焼く匂いが香ばしく流れていた。しかしこの名物の観世物小屋の野天商人のてんあきんどが商売をはじめるのは午過ぎひるからで、午まえの広小路は青物の世界であつた。夜明けから午までは青物市がここに開かれるので、西両国には荒筵を一面に敷きつめて、近在の秋のすがたを江戸のまん中にひろげていた。

霜に染められたかと思う川越芋の紅いの隣り合つて、秋茄子の美しい紫が眼についた。どこの店にも枝豆がたくさん積んであるので、やがて十三夜の近づくのが知られた。これから神明しんめいの市いちの売物になろうという生姜しょうがの青い葉や紅い根には、白い露と

柔かい泥とが一緒にぬれてこぼれていた。江戸じゆうの混雑を一つに集めたかと思われるような両国にも、暮れゆく秋の色と匂いとが漲みなぎっているように見えるのが、このごろの薄寒い朝の景色であつた。その青物の露を踏ふんで、林之助は橋を渡つた。

「あら、いらつしやい」

格子をあけると、お君はすぐに駈け出して来た。うす暗いお絹の枕もとには楽屋番の豊吉も坐つていた。前芸のお若もしよんぼりと坐つていた。いつも留守番を頼むという隣りのお婆さんもぼんやりと屈かがんでいた。どことなしに薬のけむりがしめつて匂つていた。

「おや、いらつしやい」と、豊吉は振り返つてまず声をかけた。

そうして、すぐに入口へ起つて来た。

「旦那。いけませんぜ。あれほど私が言つて置いたのに……。あなたはどうも不実ですぜ。きようはよつぽどお迎いにしようと思つていたんですが……」と、彼は林之助をたしなめるように言つた。

「いや、なにしろ御用が忙しいんでどうもこうもならねえ。あしたは節句という忙がしいなかを、きようはようよう抜け出して来たくらいなんだから、まあそう叱つて貰いたくない」と、林之助は苦笑にがわらいをした。「そうして、どうだね、病人の容体は……」  
豊吉は顔をしかめて首を振つた。

「悪くなるばかり」

「困ったもんだ。医者もあぶないと言っているかね」

「はつきりとは言わねえが、もう匙さじを投なげているらしいんですよ。なにしろ咳せきが出て、胸むねから肋骨あばらが痛いたんで熱あつが出て……。どうもこの秋は越こせまいと思うんです。わたくしも長ながらくお世話せわになつた姐あねさんですが……」

もう今にも死ぬもののように豊吉は溜ためめ息をついていた。こうなつたらいつそお絹ぬいが死しんでくれればいいというような考えが、林之助の頭かぶを稲妻いなづまのように掠さらめて通とつた。

彼はだまつて内うちへはいると、お若わかもお君きみもお婆おばさんもみな眼まなこを赤あかくしていた。林之助は自分の不人情ふにんじやうが急に恥はかしくなつて、肩かた身みが狭せまいような心持こころもちで病人びやうにんの枕まくらもとにそつと坐まると、お絹ぬいはも

う正体がなかつた。もう誰の見境いもないらしかつた。時どきに苦しうに胸をかかえながら、彼女は髪を振り乱して、衾よぎを跳ねのけて、夢中で床の上に起き直ろうとしてまた倒れた。と思うと、溺れた人が何物をか掴んですがろうとするように、彼女は痩せた手をのばして寢床の上を這いまわつた。それが傷ついた蛇ののたくつているようにも見えて、林之助にはものすごかつた。

彼はいよいよ気が咎めてならないので、まわりの人たちにむかつて頻りに自分の無沙汰の言い訳をした。屋敷の御用の忙がしいことを話した。主人が節句の登城の前日に、たとい半晌ほんときでも屋敷をぬけてこうして見舞いに来たことが、彼の不実でないという十分の証拠にはならないらしく、どの人も彼に対して冷たいよう

な眼を向けていた。

「なにしろ、わたしも主人持ちだから、毎日見舞いに来るわけにもいかない。まあ、皆さん、なにぶん願いますよ」と、林之助はみんなにくれぐれも頼んでいた。

まったくきようは忙がしいからだであるので、ゆつくりとここに坐り込んでいることを許されなかつた。彼は小半晌ばかりで病人の枕もとを起つた。

帰るときに豊吉が格子の外まで送つて出た。

「旦那、ようござんすかえ。姐さんは九死一生という場合なんですぜ。お屋敷の御用は仕方がありませんが、ほかの何事をおいてもここへ来なけりやあ義理が済みませんぜ。どうで死ぬもんだか

らなんて薄情なことはしつこなしですぜ」

林之助はだまつてうなずいた。

「不二屋のお里のおふくろが死んだそうですね」と、豊吉はまた言つた。

どこか急所をえぐられたように、林之助ははっと顔色を変えて、すぐには返事が出来なかつた。

#### 十四

林之助が帰ると、やがて午ひるが近づいた。青物市ももうそろそろ引ける時刻になつたので、観世物小屋に用のある人たちは一度に

起たつた。豊吉とお若は連れ立って帰つた。お絹はもがき疲れてしばらく昏うとうと々と睡つていた。隣りのお婆さんもこの間に家の用を片付けて来たいといつて帰つた。

お絹の枕もとにはお君が一人さびしそうに坐つていたが、ことし十五で外の恋しい彼女は、やがて病人の寢息をうかがつて、音のしないように格子をあけて、そこから半身を出して何を見ると、もなしに表を覗くと、長い往来は露地の幅だけに明るく見えて、そこにはいろいろの秋の姿をした人が廻り燈籠のように通つた。鯁しこを売る声もきこえた。赤とんぼを追いまわる子供の鬮もちぎ竿おも見えた。お君はうつとりとそれを眺めていると、内からお絹の弱い声が聞えた。

「君ちゃん、君ちゃん。いないの」

「はい」

はつきりと返事をして、お君はあたふたと内へ駆け込むと、お絹はいつか眼を醒ましていて、薬をのませてくれと言った。まだ少し早いと思つたが、お君はすぐに薬鍋を温めにかかった。粥かゆをたべるかと訊いたら、お絹は黙つて首を振つた。

托鉢たくはつの坊主が門かどに立つて鉦かねを叩いたので、お君は出て行つて一文やった。薬が煮つまつて枕もとへ持つてゆくと、お絹は苦しうにひと口すすつたが、それはほんの喉しめを湿すに過ぎないらしかった。

「君ちゃん。あたし少しお前に言つて置きたいこともあり、頼ん

で置きたいこともあるんだよ」と、お絹は案外はつきり言った。

これほどしつかりと口が利けるようならば、姐さんも少しよくなったのかしらと、お君はなんだか頼もしいようにも思われた。

「君ちゃん、お前にはいろいろ世話になったけれども、今度はあたしももういけないよ。あたしも覚悟しているよ」

お君は涙ぐんで聞いていた。

「そこで、あたしが頼むことというのは、お前も大抵察しているだろうけれど……。向柳原の林さん、あの人はずいぶん薄情だと思うよ」

「あら、林さんはもう少しさつきまで来ていましたよ」と、お君は慌てて打ち消すように言った。

「そう」と、お絹はさびしく笑った。「そりやあよんどころなし

の義理づくさ。あたし、どう考えてもあの人は人情がないと思う」

一体、この家を逃うちげ出したというのがすでに頼もしくない。

この夏頃からあたしに隠して列りび茶屋へ遊びにゆく、それがまた憎らしい。たしかな証拠を握っていないけれど、どうもお里と林之助はひと通りの馴染みではないらしく思われる。証拠がないので今まで堪忍していたが、いよいよこうと見極みきわめが付いたら、あ

たしは不二屋へ蛇を持って行って、いつかお此を責めたように、お里をむごたらしく責めてやりたい。お里の頸へ蛇をまき付けて、子供が野良犬をひきまわすように両国じゆうを引き摺ずつて歩いてやりたいと思っていた。しかしそれももう出来ない。就いてはあ

たしの死んだのを幸いに、二人がいい気になって仲よくするよう  
なことがあつたら、どうぞあたしに成り代つて仇を取つてくれと、  
彼女はしみじみと言つた。

お君はやはり涙ぐんで聞いていた。

「お前は子供でも蛇という味方があるんだからね。大人だつて怖  
いことはないよ。あたしの魂も蛇に乗りうつつて、きつとお前の  
加勢をしてあげるからね。いいかい」

もし林之助に見せたら気絶するかも知れないと思われるほどに、  
お絹のくぼんだ眼はいよいよ物すごく光つた。糸のように痩せ細  
つた顔と、この物すごい眼をじつと見つめていると、お絹が蛇か、  
蛇がお絹か、お君にも判らないほどに怖ろしかった。お絹は枕も

とへ蛇の箱を持って来いと言った。

「君ちゃん。神棚の御神酒おみきと、それからお米を持って来ておくれ」

箱はお絹の枕もとに運び出された。彼女はお君にかかえられて蒲団の上に起き直って、自分の尖った膝の上にその箱をのせて貰った。いつものように箱をとんとんと軽く叩くと、一匹の青い蛇の頭が箱の穴からぬるぬると現われた。お絹は小さい土器かわらけに神酒きどつくり徳利のしずくをそそいで、その口さきへ押しやると、蛇は蜜をなめるように旨そうになめ尽くした。お絹は更に自分の手のひらに米をのせて出すと、蛇はさとい眼で左右を見まわしながら、ひと粒も残さずにのみ込んでしまった。

「お前、あたしを忘れちゃいけないよ。もういいからお帰り」

お絹に頭を撫でられて、蛇はおとなしく首を引つ込めた。彼女が再び箱をたたくと、待ちかねていたように第二の青い蛇が穴から首を出した。お絹はかれにも神酒と米をあたえた。そうして、同じようにあたしを忘れるなど言つて聞かせた。かれが穴に隠れると更に第三の青い蛇が頭をあらわして、これもお絹の手から神酒と米とを授けられて、嬉しそうに首を垂れていた。彼女はその蛇の首をつかんで穴からずるとひき出すと、蛇は二つに裂けた紅い舌を火焰ほのおのようにへらへらと吐き出しながら、お絹の瘦せた手首へたわむれるように絡からみついた。

銚ちようし子出るときや涙で出たが……

小声で唄いながら、お絹は片手で膝をたたいて拍子を取ると、

蛇はなめらかな膚はだに菱ひしがた形の尖うろこった鱗うろこを立てて、まぶたのない眼を眠るようにとじた。しかしかれはいつまでも安らげくその音楽を聞いていることを許されなかつた。

今じゃ銚子の風もいや……

唄の聲がふるえながら消えると同時に、彼女は尾の先きをつかんで、ずるずると手首から引きほどかれた。

「君ちゃん。お前、知っているだろう。こうして、こうするんだよ」

尾をつかまれた蛇は縄をわがねたように円を描いて、空を二つ三つ舞ったかと思うと、その持ち主の細い頸にくるくるとまき付いた。お絹はお君を見返つてにやりと笑つた。お君は身を固くし

てじつと見つめていた。

「さあ、いいからお帰り」

第三の蛇もお絹の頸を離れて、もとの箱の穴へ追いやられた。

「あたしが死んだらば、お前もやつぱりこの商売になるかえ」と、お絹は訊いた。

「あたし、巳年みとしでないから駄目ですわ」

「そうとも限らない。お若だつて巳年じゃないけれど……」と、お絹は考えていた。「だが、まあ、止した方がよかろうよ。こんな商売するもんじやない。あたしだつて、こんな商売でなけりやあ男に愛想をつかさねなかつたかも知れない。だけれども、あたしがいなくなると、おまえは家うちへ帰らなけりやなるまい。可哀そ

うだね」

お君は両袖で顔を掩いながら啜り泣きをはじめた。

「おつかさんが違っているんだからね。あたしももう少し達者でいれば、お前の面倒を見てあげられたんだけど……。おたがいに運が悪いんだから仕様がな」

お絹は崩れるように蒲団の上に俯伏すと、お君は声を立てて泣き出した。

「姐さん。後生ごしやうですから死なずにくださいよ。姐さんが死ねば……。あたしも死んでしまいます」と、お君は又しやくり上げた。

「そりやああたしだって死にたかあないけど……。あたし、ほんとうに死に切れないけど……。いいかい。今のことはお前に頼ん

だよ。あたしの着物でも簪かんざしでもみんなお前にあげるから。なに、お葬とむらいぐらゐは小屋の方でどうかして呉れるだろうよ。だがね、この蛇は人にうっかり渡しちやいけないよ。これだけ飼ひ馴らしてあれば売つてもいい値になる代物しろものだし、また何かの役にも立つかも知れないから。誰がなんと云つても渡しちやいけないよ」「はい」と、お君は泣きながらうなずいた。

きようは風のぐあい、東両国の觀世物小屋の囃子はやしの音が手に取るように聞えた。お絹はさつきから自分でも不思議だと思ふくらいに気分もはつきりして、舌も自由に働いたのであるが、言うだけのことを言つてしまうと、急にがっかりと気がゆるんで、目がくらみそうに頭がぼてぼて来た。彼女は俯伏したままでまた正

体もなく昏睡に陥ったので、お君はそつと寄つて上から衾よぎをきせてやった。縁の下では昼でもこおろぎが鳴いていた。

日が暮れると、豊吉をさきに立てて、お若やお花やお辰がぞろぞろと見舞いに來た。お花とお辰はさきへ歸つた。豊吉とお若はあとに残つて、お君と三人で薄暗い行燈のもとに黙つて坐つていた。

さつきから幾たびも風鈴そば屋の声を聞くので、この頃の夜もだんだんに長くなつたのが思われた。綿入れの節句もあしたに迫つて、その夜寒よさむをよび出すような雁がんの聲が御船蔵おふなぐらの屋根のあたりで遠くきこえた。

「さびしいね」と、お若は襟をかき合わせた。

「さびしいなあ」と、豊吉も腕を組んだ。

大川の水の音もここまで聞えるほどに静かな夜であつた。お絹は急に夢から醒めたようにもがいて、再び蛇ののたくるように蒲団の上を這いまわつた。彼女は林之助の名を二度呼びつづけた。三度目にお里の名を呼んだ。

## 十五

豊吉が向柳原の屋敷へあわただしく駆け付けたのは、その夜の五つ半（午後九時）ごろであつた。

「お絹さんはとうとういけませんでした」

「ふむ。いつ頃……」と、林之助もさすがに顔色を変えた。

「たった今です。ともかくもすぐ来ておくんなさい。みんなも待っていますから」

林之助は行かれないと気の毒そうに言った。なにぶんにも主人はあした早朝の登城であるから、自分がこれから屋敷を明けるわけにはいかないと断わった。豊吉は不平らしくぐずぐず言っていたが、林之助はまったくどうしても行くことが出来ないのであった。彼はいろいろに訳をいって、ようように豊吉をなだめて帰った。

「薄情ですねえ。お絹さんが化けて出ますぜ」と、豊吉は忌味いやみをいって帰った。

なんと言われても林之助は仕方がなかった。豊吉ばかりでなく、きびしい屋敷の掟おきてを知らない者どもは、みんな自分を薄情とか不実とか非難ひなんしているであろうと、林之助は心苦しく思った。そうして、お絹の死に目に会わなかったことが残り惜しくも思われた。自分にも罪があるように思われて何だか気が咎めてならなかった。それと同時に、自分のからだをくくられていた縄が自然に解けたような軽い気にもなった。

「おれがお絹を殺したわけではない」と、彼は自分で自分を弁護した。死に目に会えなかったのも自分の罪ではない、今夜行かないのも自分の薄情からではないと、彼はいろいろの理屈をかんがえて努つとめて自分を弁護しようと試みた。それでも何だか自分にう

しろ暗い点があるように危ぶまれた。

彼は今にもここへお絹のおそろしい眼が現われて来はしまいかと恐れられた。お絹に別れたことも悲しかった。うるさいとか執念ぶかいとか思いながらも、彼女と自分とのあいだには切ることでできない絆きずながしつかりと結び付けられていたのであつた。自分も無理にそれを振り切ろうとはしなかつた。その絆が自然に切り放されて、自分は今初めて自由の身となつた。彼は思わずほつとすると同時に、又なんとなく心淋しくなつた。お絹が急に恋しく懐かしくも思われた。

お経の文句は何も知らない彼も、今夜は仏壇代りの机にお絹の俗名をかけた紙片を飾つて、それにむかつて一心に南無阿弥陀仏

と念じた。ときどきに部屋の障子に女の髪の毛がさらさらとさわ  
るような音が耳について、彼は総身そうみに水を浴びせられたように感  
じた。

屋敷を出られない彼は今夜はここで通夜をするつもりで、明け  
からすの鴉のきこえるまで行儀よく机の前に坐っていると、初めてお絹  
と馴染んだ時のことや、本所の家に一緒に暮らしていた時のこと  
や、自分がここへ来てから後のことや、いろいろの思い出がそれ  
からそれへと湧き出して、彼の眼は絶え間なしにうるんだ。お絹  
はやはり生かして置きたかった。憂しと見し世ぞ今は恋しきとは  
よく言ったものだ、彼は今更のように感じた。

明くる日は主人が登城の当日で、林之助は何を考えている間も  
ひま

なかつた。彼は用人に叱られないようにかいがいしく働いた。登城もとどこおりなく済んで、主人が屋敷へもどつて来ると、彼もまず荷を卸したように思った。お絹の葬いはきよようの暮れ方と聞いているので、たとい途中の見送りは出来ないまでも、せめて門かどおく送りだけでもしたいと思つて、彼は早々に屋敷を出た。出るさきになつて気がついたのは、お里の母の死を聞いた時とおなじように、彼は幾らかの銀かねを用意して行かなければならない事である。いつもの場合と違つて、彼は空手からてでお絹の家の格子をくぐるわけにはいかなかつた。

このあいだの二歩がまだ返してないので、林之助は又もや用人に頼むことも出来なかつた。屋敷じゆうにはほかに融通の付きそ

うな人物は見付けられなかった。彼は苦しまぎれに門番の老翁おやじを口説いた。門番は内職をして小金を溜めているということを知っているからであった。

門番は素直に貸してくれないのを林之助はいろいろに頼んだ。それでも彼は肯きかなかつた。門番は林之助が蛇つかいの小屋や列び茶屋へ足近く入り込むことを知っているので、彼の銀かねの入り途を疑って、そういう不信用の人間に大事の金を貸されないというような口ぶりで、あくまでも頭かぶりを振り通した。

林之助も根負けがして、仕方がなしに屋敷を出たが、どう考えでも空手では行かれなかった。彼は友達の梶田弥太郎のところへ行つて頼もうと思つたが、これから訪ねて行つても果たして家に

居るかどうだか判らなかつた。居たところできつとその銀が出来るかどうかも疑問であつた。そんなことに暇取つているうちに、葬いが出てしまつては何にもならないと、林之助はむやみに気が急せいた。

「ええ、もう仕方がない」

彼は思い切つて馴染みの質屋へかけ込んで、大小を投げだして銀を借りた。武士の大小であるから片時へんしも離すことはできない。今夜じゆうにはきつと請け出すと番頭を口説いて、彼は二両二歩を借り出した。それを懐ろにして本所へ一散にかけ付けると、お絹の棺は小屋の者や近所の人たちに寂しく送られて、今かつぎ出されようとするところであつた。林之助は棺のまえへ坐つて線香

を供えた。美しい水色のかみしももそこには見えなかった。けばけばしい華魁おいらんの衣裳もみえなかった。ただ白木の棺桶が荒縄で十文字にくくられているだけであつた。

あまりの果敢はかなさに林之助は胸がつまるようになって、涙が止めどなしにほろほろと流れた。彼は取りあえず一両の金を包んで、きよようの葬式万端を取りまかっているという小屋主に渡した。

八幡鐘が夕六つを撞つき出すところに、棺はいよいよ送り出された。お若もお君も目を泣き腫らして棺のそばに付いて行つた。林之助も家の外まで送つて出ると、ゆうぐれの町には秋の霧が薄く迷つて、豊吉とほかの二、三人が振り照らしてゆく提灯の灯の影は、その霧隠れにぼんやりとゆれて行つた。それをいつまでも見送つ

て立つ林之助の眼には涙のあとが乾かなかつた。

引つ返して内へはいると、隣りのおばあさんが留守番役にひとり坐っていた。林之助は彼女からお絹の臨終の有様などを詳しく聞いた。お絹が最後にお里の名を呼んだのを知つて、彼はまたぞつとした。

寺は深川で、見送りの人たちも四つ（十時）前にはみな歸つて来た。なぜか知らないが、みな林之助に対して無愛想で、彼に悔みの口上をいう者は一人もいながつた。豊吉やお若もわきを向いていてほとんど挨拶もしないばかりか、豊吉は時どき当てこすりらしい毒どくぐち口さえ放つた。それも畢ひつきよう竟は屋敷の物堅おきてい掟を知らないで、いちずに自分を不人情の人間と恨んでいるせいである。

うと林之助も察していたが、今となつてはいちいちその言い訳をするのも面倒であつた。武士が大小まで手放して来たほどの切ない心はお前たちには判るまい。おれの心は仏がよく知つてゐる筈だと、彼は肚はらのなかでかれらの無智をあざけつていた。

そのうちに小屋主は気がついて林之助に注意した。

「失礼でございますが、旦那様、お腰の物は……。こんな混雑の時でございますから、もし間違ひでもありません」

林之助ははつと赤面した。まさか大勢の前で大小を質に入れて来たとは言えなかつた。返事に困つておどおどしていると、豊吉は薄あばたの顔に三角の眼をひからせた。

「なるほど旦那は丸腰で……。へえ、もうきょうかぎりお屋敷の

方はおやめになつたんでござえますかえ。ははあ、それじゃあこの姐さんがいなくなつたんで、おおびらでお里の方へ引き取られるようなことで……。なんでもお里のおふくろの死んだ時にやあ大層に肩を入れてお世話をなすつてやったそうで……。へえ、みんな知つていますぜ」

彼は憎々しくせせら笑つた。丸腰を見とがめられて赤面してゐるところへ、又もやこんな忌味を言われて、林之助はむつとした。「お里のおふくろが死んだ時に顔を出したのがなんで悪い。顔を出そうと出すまいと俺の勝手だ。貴様たちにおれの料りようけん簡かんがわかるか」

豊吉も負けずに何か言おうとするのを小屋主がおさえた。ほか

の者もなだめた。ともかくも武士の林之助を相手にして喧嘩をしては面倒だと思つたらしい。

それはそれで済んだが、四方八方から意地のわるい眼で睨まれているようで、林之助はなにぶんにも居ごこちが悪いので、ろくろく挨拶もせず、ふいと表へ出てしまった。彼の腰のまわりは寂しかった。そのうしろ姿を見送つて、内ではくすくす笑う声も洩れきこえた。

「けしからん奴らだ」

林之助は腹が立つて堪まらなかつた。彼はふところにまだ一兩二歩の銀かねが残っているので、近所の軍鶏屋しやもへ又はいった。悲しみと怒りとがもつれ合つて、麻のように乱れている胸の苦しみを救

うために、彼はたんとも飲めない酒を無暗に飲んだ。

「このあいだもここで飲んで、それからお里の家へ行ったのだ。  
今夜はどこへ行こう」

彼は丸腰で屋敷の門をくぐれないことを考えた。もう今頃からどこへ行つても、大小をうけ出す銀の才覚もできそうもない。さりとしてお絹の家へ引つ返す気にもなれないので、林之助は行くさきに迷った。酔いも手伝つて彼はもう自棄やけになつた。今夜もこれからお里の家へ行こうと思つた。お絹はもう死んでいる、お里のおふくろも死んでいる、だれにも遠慮気兼ねもいらなうと思つた。軍鶏屋を出ると、彼の足は外神田へむかつた。

めずらしく霧の深い夜で、林之助は暗い海の底を泳いでゆくよ

うに感じた。

十三夜も過ぎた。十五日は神田祭りで賑わった。

林之助はお里と一緒に祭りを見物した。彼の大小はお里の着物や帯と入れ替えにして、無事に質屋の庫くらから請け出されていた。

お里の顔には母をうしなつた悲しみの色がもうぬぐわれていた。

林之助の胸には、お絹をうしなつた愁いの雲が吹きやられていた。二人に取つては楽しい祭りの夜であつた。

祭りに騒ぎ疲れた人たちは、さらに新しい騒ぎの種を発見して驚き騒いだ。

祭りのあくる朝、お里の家がいつまでも戸をあけないのを不思

議に思つて、近所の者が戸をこじあけて窺うと、お里の寝すがたは階下の六畳に見えなかつた。彼女は二階に若い男と枕をならべたまま死んでいた。ふたりの頸には青い蛇が絞め付けるように固くまき付いていた。

それと同じ日に、両国の秋の水にお君の小さい死骸が浮きあがつた。彼女もふところに一匹の青い蛇を抱いていた。

# 青空文庫情報

底本：「江戸情話集」 光文社時代小説文庫、光文社

1993（平成5）年12月20日初版1刷発行

入力…tatsuki

校正…かとうかおり

2000年6月16日公開

2008年10月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 両国の秋

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>